北支

現地編輯

THE NORTH CHINA

12

正定城外

京漢線

The Cheng Ting Castle,
Peking-Hankow Line

張北

その一

京包線張家口の西門を出て、箱根の嶮を往くが如き九十九折の坂道を登りつめ、一轉して渺茫たる蒙古高原を貫く一筋の自動車路を西北に約五十キロばかり進むと、チヤハル盟公署の所在地張北の南門につく。この道路は曾つて宋哲元が多くの部下を督勵して築造した軍用道路であるが、現在は蒙疆汽車公司のバスが定期運轉してゐる

張北街道

張北市街

張北南門

A General View of Chang Pei, Near Kalgan

張北

その二

張北は張北縣の縣城でもあり、東西一支里、南北二支里ばかりの土壁に圍まれ、人口二萬餘の都市である。凡そ遊牧を業とする蒙古の地で城壁を圍らし、都市を形成してゐるところは、漢人の蒙地進出のもとに經營されたもので、張北も漢人の土着民多く、言語風俗ともに支那各地と殆ど異るところがなく、蒙古包など郊外のよほど隔つたところでなくてはみられないやうな狀態である

この地は今次事變で皇軍が滿洲國熱河省より進擊した新戰場の一つであり、過去數年の間蒙古問題の展開と共に政治機關の中心地となり、蒙古聯合自治政府の搖籃の地をなしたところである

また商都及び西スニット、平地泉と共に綏東經濟の中心地であり、馬市その他の市が立つて、漢・蒙人の間に取引が盛んである

馬の市

鑄掛屋

馬の宿

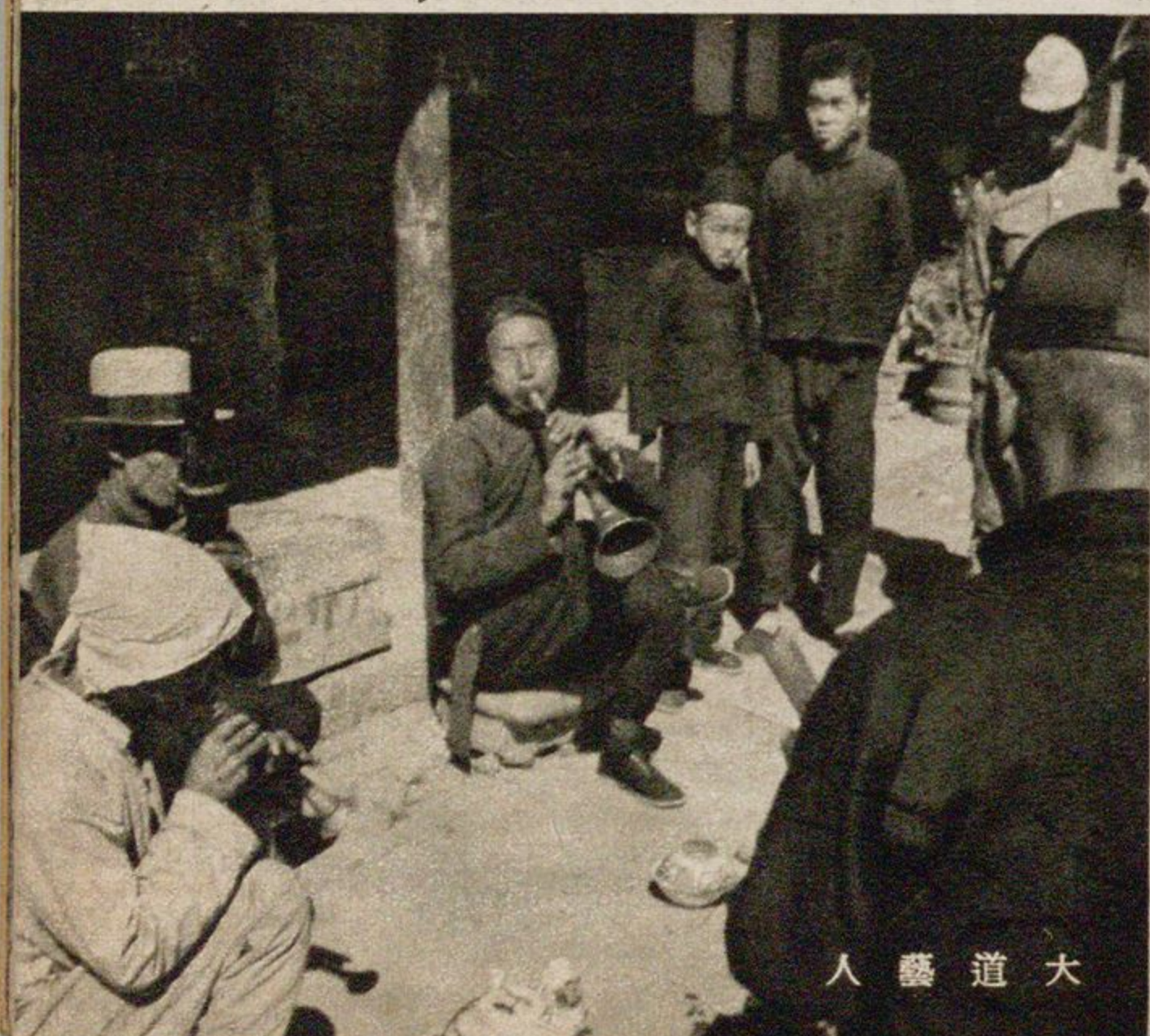
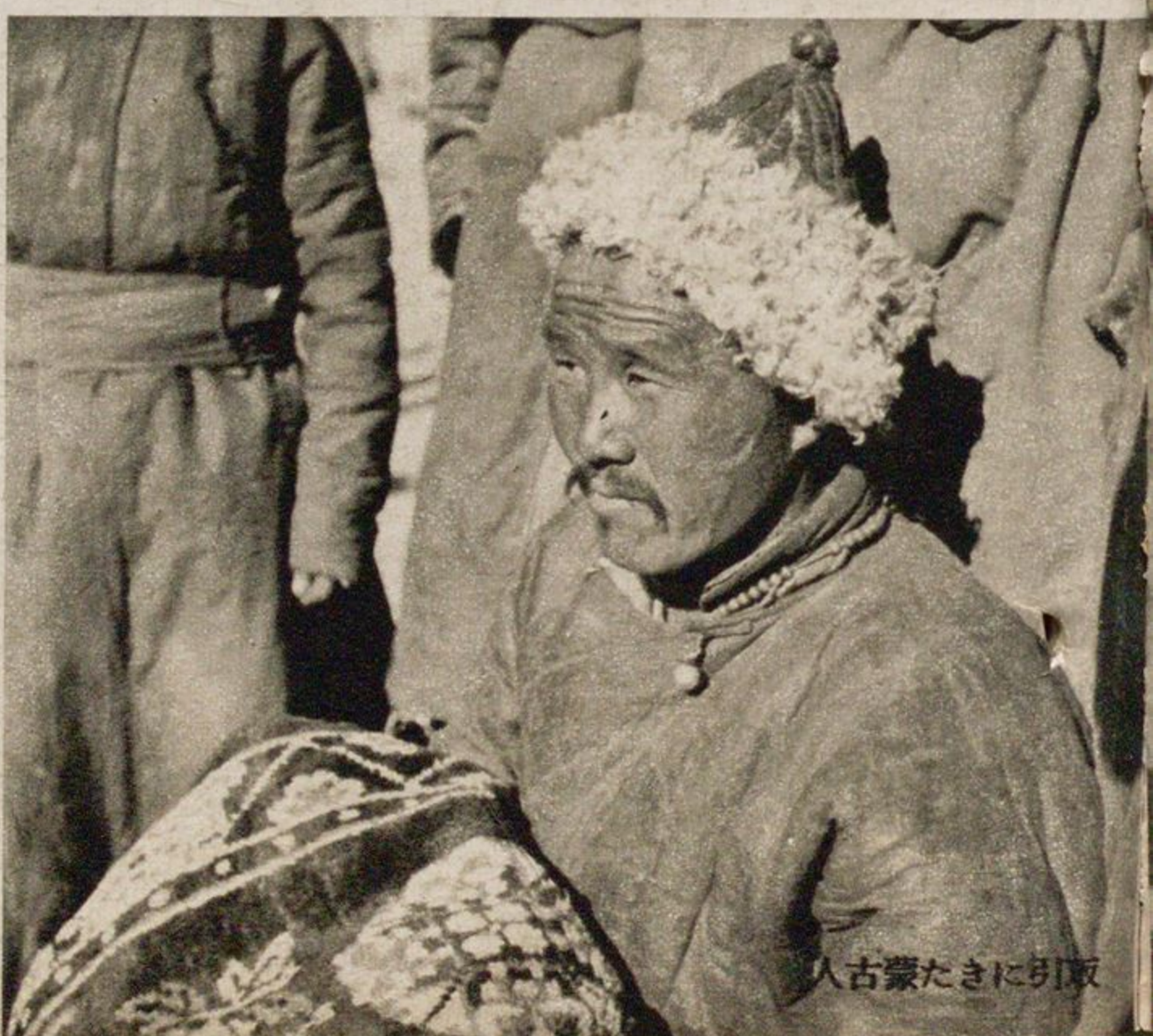
衣服屋

牛の宿

大道藝人

取引にきた蒙古人

羊毛

包頭

Wool and Plenty of it. Mengchiang

支那の羊毛は黄河以北の所謂北支・蒙疆及西北地方一帶に產し、印度と並んで東洋に於ける二大羊毛圈をなしてゐる年產は一億封度以上に達するが、品質は少數の優良種を除いて一般に不良であり、アメリカ、ドイツ等に輸出してカーペツトウールとして用ひられてゐるに過ぎない

元來、支那の牧羊は皮革・毛皮及肉等を目的とし、羊毛については殆んど注意が拂はれてゐないので、一頭當りの收毛量も濠洲の優良種等に比べて十分の一にも達せぬと云はれてゐる

しかし、昭和六年の金輸出再禁止以來飛躍的發展を遂げ、今や世界的羊毛工業國として年々莫大な羊毛を消費しつゝある日本を近隣に控へて、質の改良・増產が考慮されてゐるので、新經濟圈の機構整備と共に斯業は必然的發展の機

黃河々畔の羊毛の積出し

羊に水をやる

羊皮の運搬

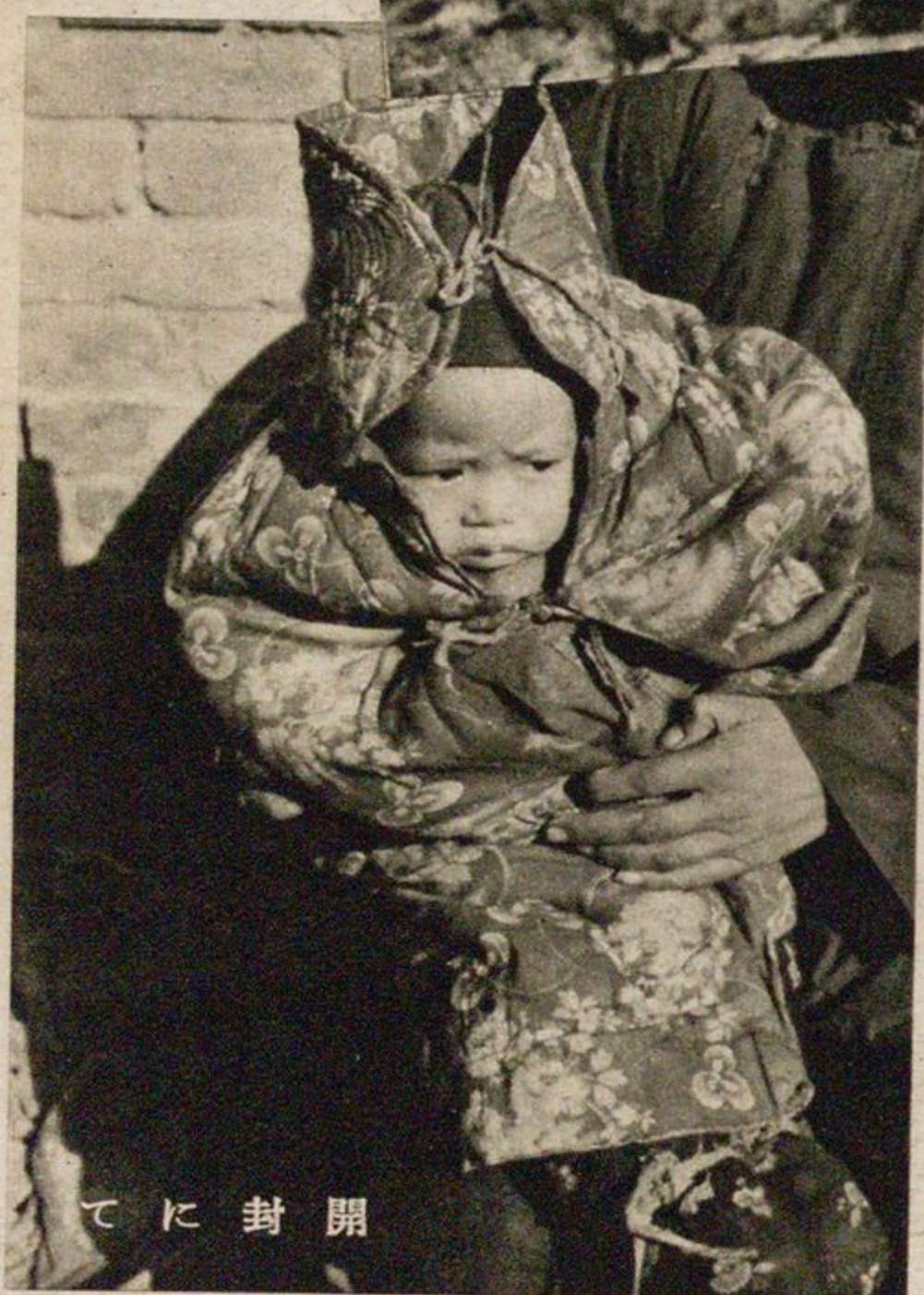
運に向ひつゝあると見る事が出來よう。斯くて我國羊毛資源の英米依存離脱、圓ブロック内自給可能となれば國防、經濟の上に齎らされる影響は甚大である

子供の冬

同蒲線にて

開封にて

開封にて

濟南にて

漁村の冬

Winter in a Fishermen's Village

隴海線・海州

津浦線・濁流鎭。氷を破つて魚をとる

射撃

樹上の警備

路警

Railway Guards of the North China Railway Co,

北支、蒙疆に旅して、先づ眼を惹くものは、列車内や驛頭を警戒してゐる武装物々しい兵隊さんに似た一團のあることです。彼等は、列車内や驛頭の乘降客に對し、憲兵さんやお巡りさん達のやうに、いち〳〵嚴密な檢問檢索を行つてをります。また時には兵隊さんと一緒に、匪賊討伐に出動し、赫々たる武勳を樹てることもあります。しかしこれは純然たる兵隊さんでもなければ、また憲兵さんやお巡りさんでもないのです。つまりさうした人達の代行權をもつてゐる華北交通會社の從業員—路警なのです。北支、蒙疆では密輸入やその他の犯罪が多く、なほ

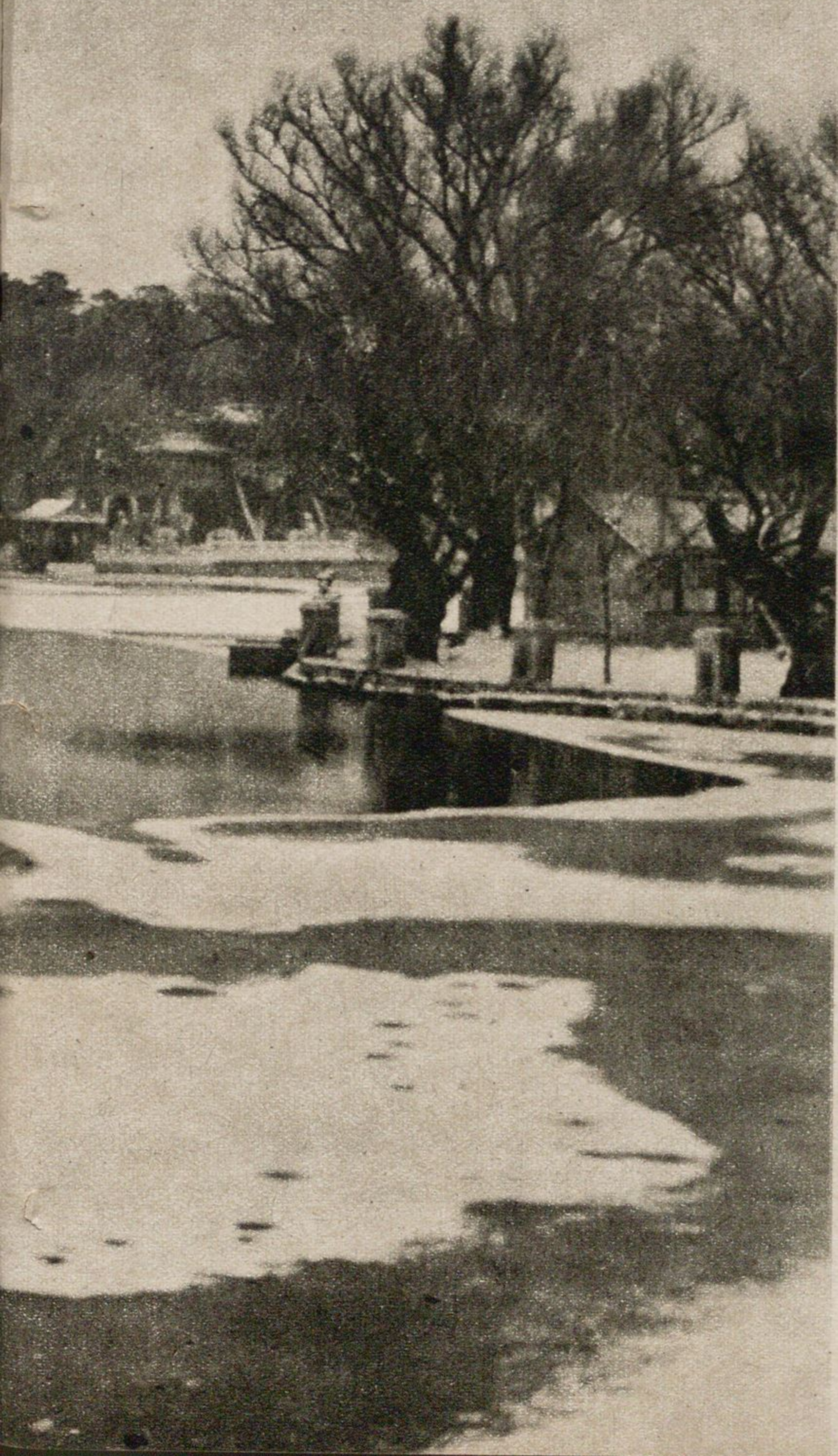
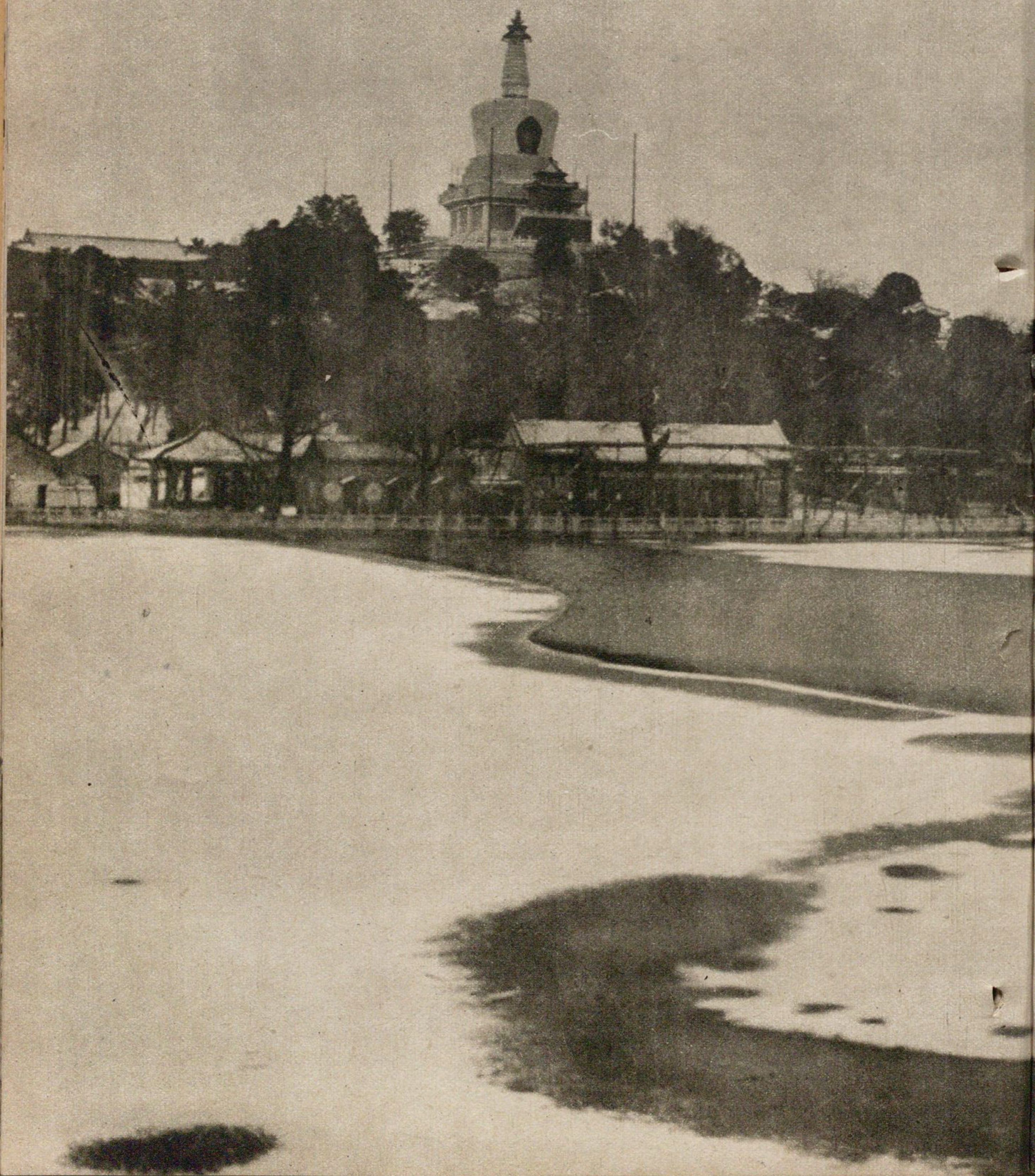
不審訊問

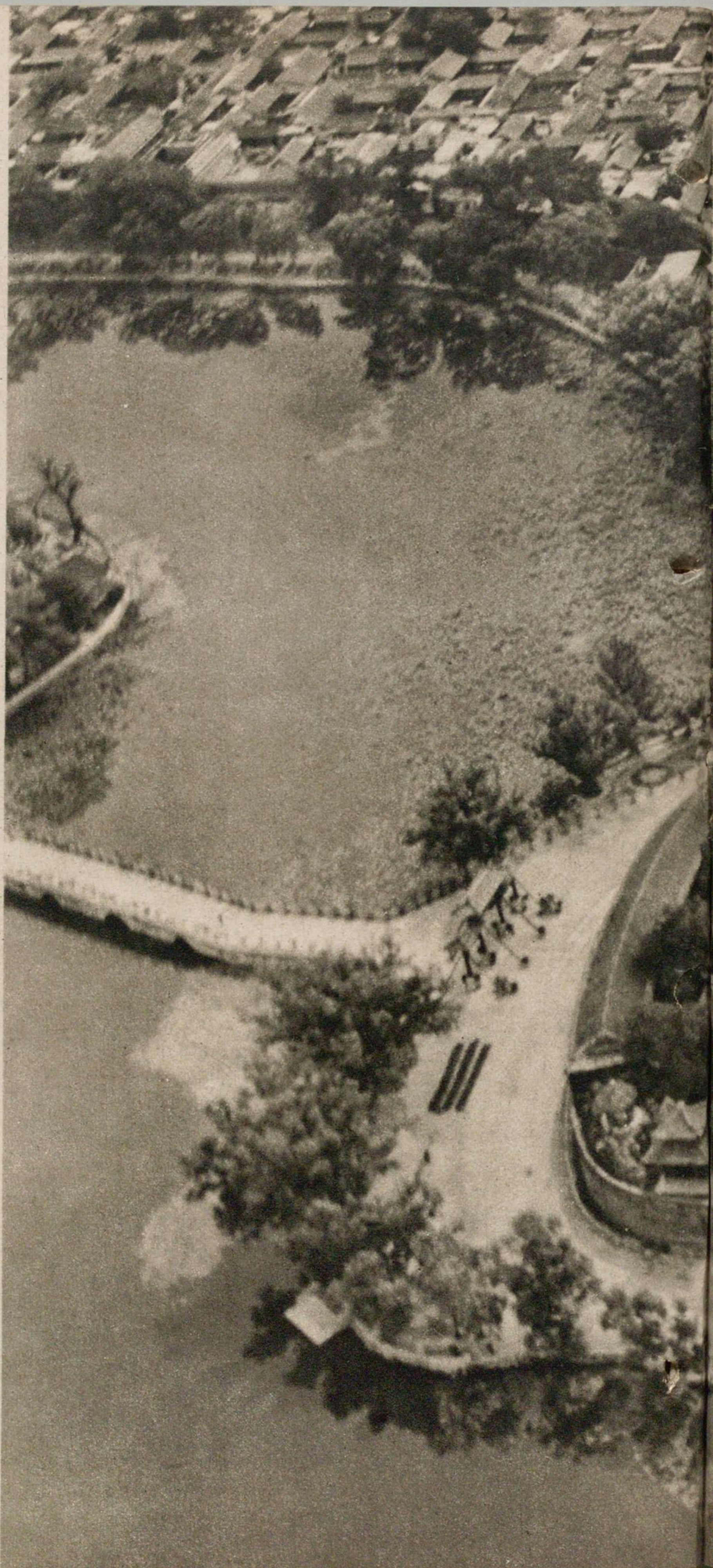
巡察

夜間信號發音器の取りつけ

電話連絡

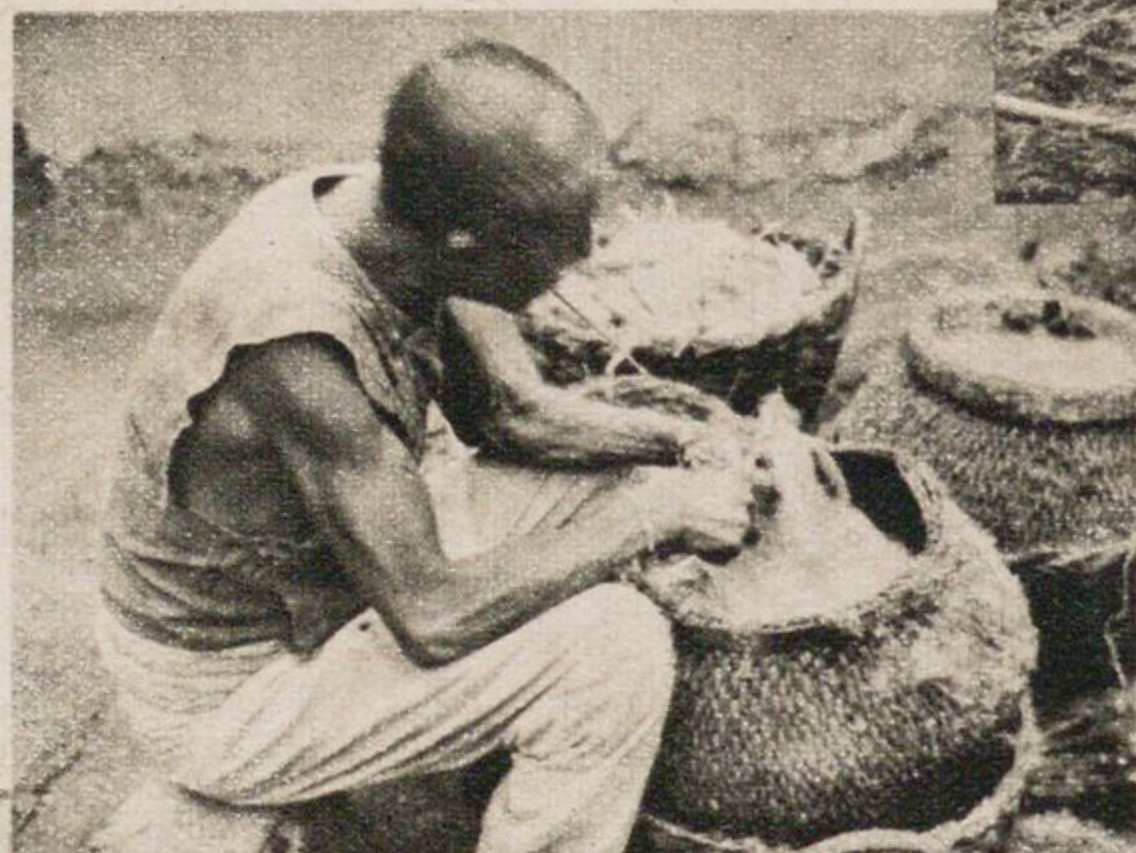
その上に匪賊といふ厄介物が跳梁しますので、會社としては當局に協力して、管内五百四十の驛所在地はもとより、自動車や船筏等にまで、彼等を配置してをります。ですから會社では立派な路警訓練所を北京や、その他の主要都市に設け、現役軍人の指導のもとに、軍隊同様の猛訓練をつづけ、明朗新大陸の實現に努めてゐるのです

北海凍る
北京

Ice on the North Lake Waters, Peking

團城俯瞰

北京　北海公園入口

Aerial View of Round Castle, North Lake, Peking

草紙をつくる

京包線

Manufacturing Packing Paper at Hsin Pao An, The Peking-Paotou Line

支那店でちよつとした買物を包んでくれる草紙は、日本のデパアトあたりのハイカラなのと違つて飽迄實質本位である。別にチリ紙（屑紙ボロ等利用）があり、一般に便所とか、飯館の皿拭に使つてゐるが製法は大體同じ。この寫眞は京包線の新保安堡にて撮影のもので、製法が原始的で家庭工業としてもなかなか面白い。此地の草紙は年産五千包（一包約二千枚）この一包は十圓で北京天津方面に取引される。これは北京郊外等でも作つてゐるが、供給不足して輸入するわけである。

イ、原料小麥稈を石灰と混ぜ直徑二間位の丸積にして、その底から火を焚いて蒸燒にする

ロ、一度水洗して、それに蒲の穗をほぐしたものと合せ、濕つてゐるうちに臼に入れ馬に曳かしてつぶす

ハ、潰したものを湯の中に入れ、長さ二尺五寸、幅一尺程の水漉を通せば、濡れた草紙になる

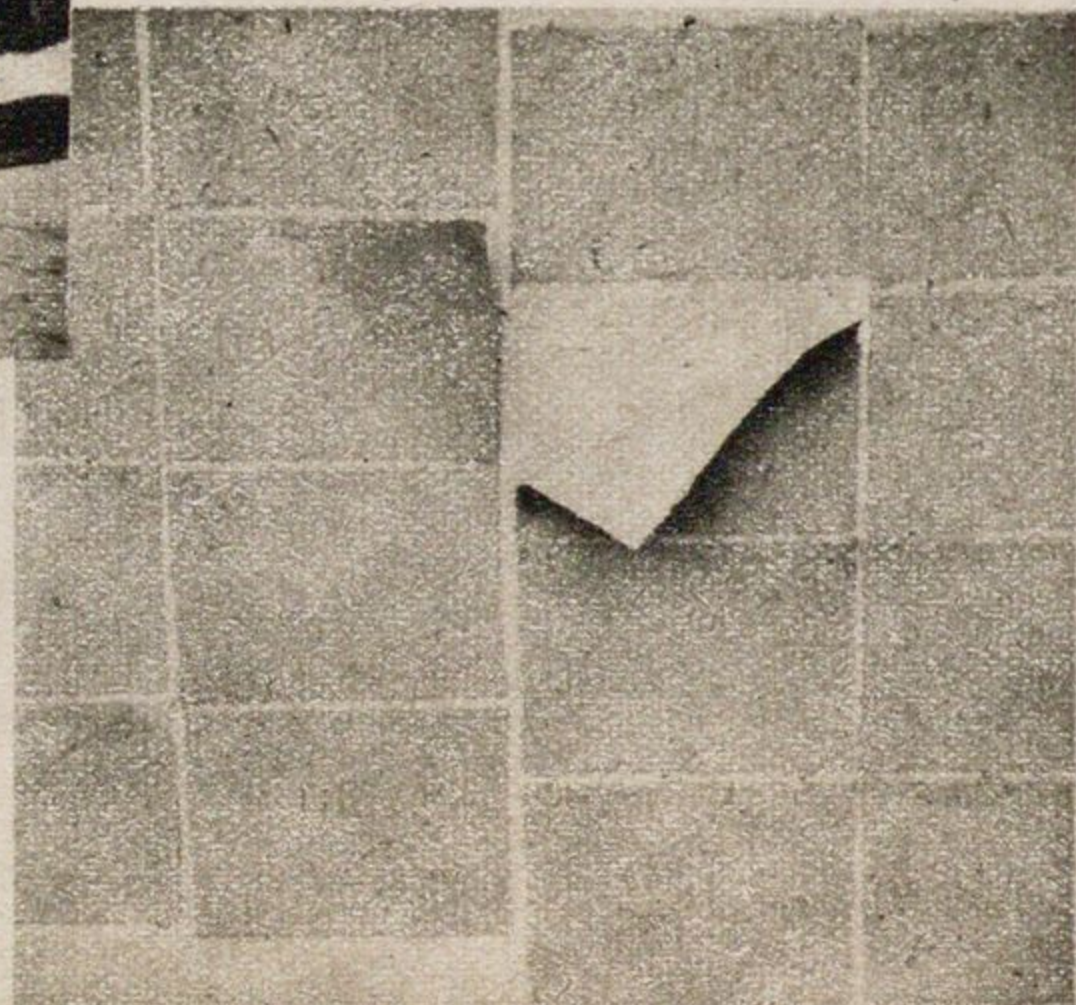
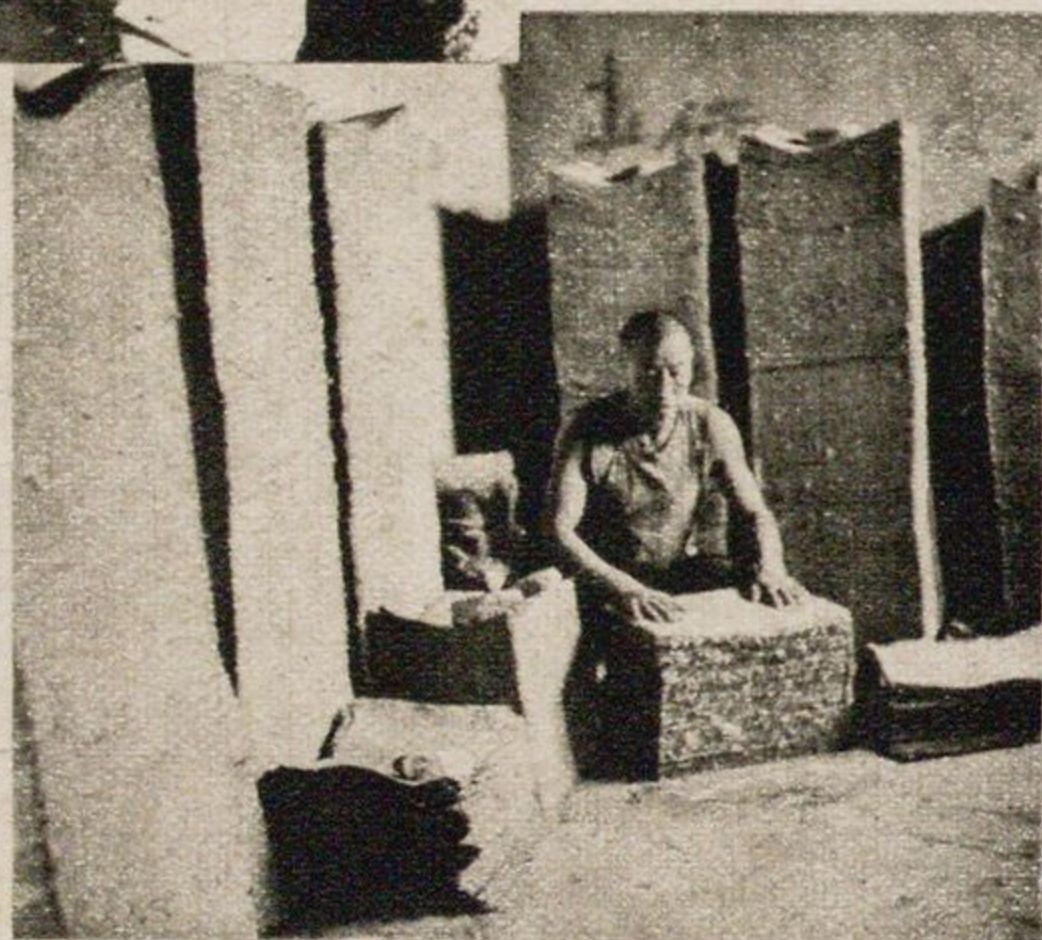
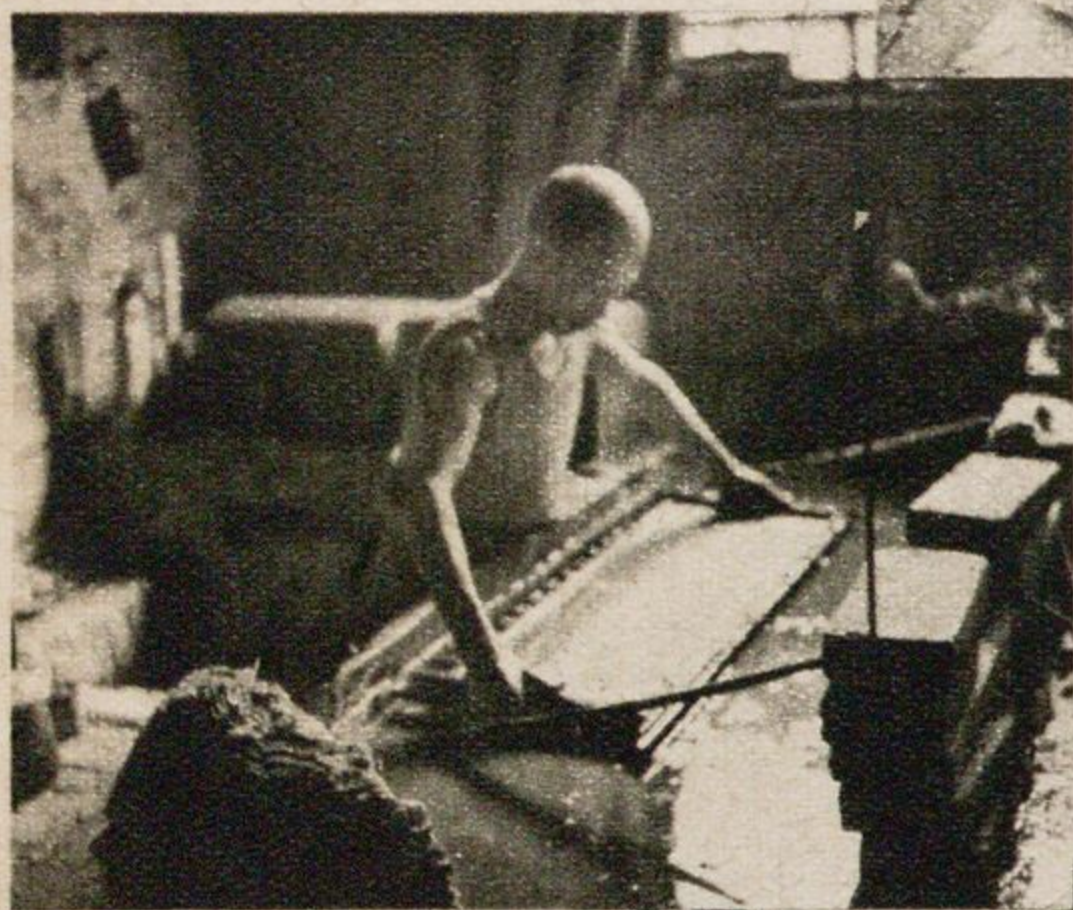
ニ、それを専用の塀に貼り、並べて天日に乾かす

臨汾關帝廟前の影壁

壁

北京故宮天一門壁の浮彫

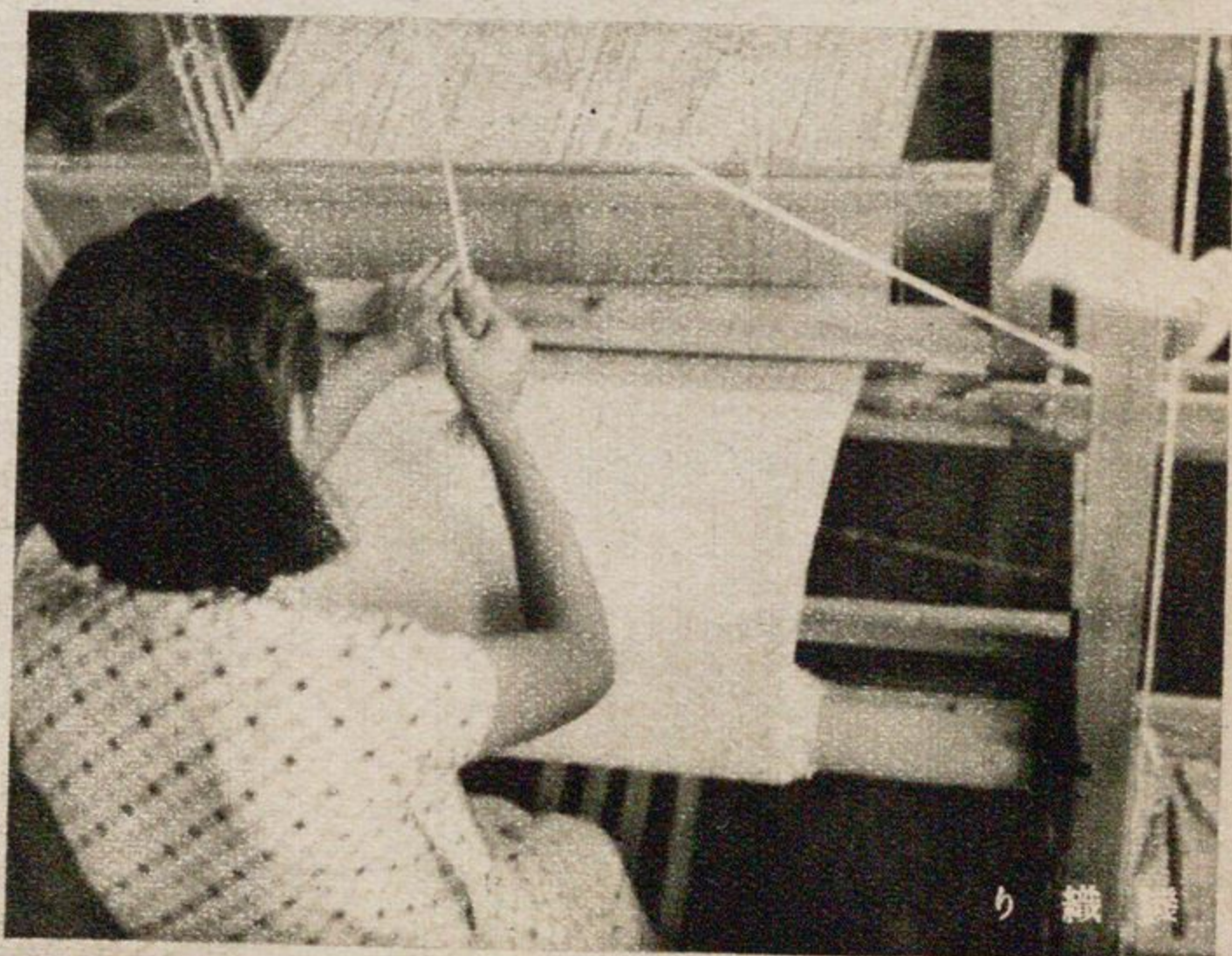
Carvings on the Walls

手工廠付の託兒所

婦女手工廠は北京景山後大街にあり、昨年十一月、市の社會局が失業婦女の救濟を目的として設けた授産場である。現在、技師五名、教員七名が二百餘名の收容者を指導してゐる入廠すれば費用は一切不要。裁縫、刺繍、玩具製造などを教はる。成績優秀な者には奬學金が出る。廠員が製作する衣服、靴下、玩具などは薄利多賣主義で一ケ月三千元内外も市中に捌かれる、入廠一年の後、獨立したり、工廠に殘つて働いたりする

仕立部

通勤

機織り

北京　婦女手工廠

Institute for the Training of Unemployed Chinese Women and Girls at Peking

晝休み

香柏

香柏を日本では兒手柏（このてがしは）と云つてゐる。丁度葉の形が子供の掌に似てゐるからであらう。この原產地は支那であつて側柏・㮯・扁柏・圧松・雲片柏など樣樣な呼び名を持つてゐる。日本滿洲にも廣く植栽されてゐる。その材は名の示すやうに芳香あり且美麗である。支那では聖木として昔からよく寺廟の境內に植ゑられた。亦高貴な人の棺材にも使はれてゐる。

The Oriental Arbour-Vitae Tree

日本婦人の進出

Japanese Womanhood at Work in Peking

北支に於ける國防婦人會員は三萬一千餘人。一月に一回傷病兵を慰問したり兵營に行つて洗濯の手傳ひをしたり、前線の驛では軍人に湯茶の接待をしたり仲々めざましい働きをしてゐる

今年の七月から北京も自動電話になつて便利になつたが、それまでは日本語が中國人の交換手に仲々通じなくて電話よりも步いた方が早いと言ふ定評があつた。寫眞は日本人の指導をうける中國人交換手

北京には日本人の小學校が三つある。事變の起る前までは百數十名にすぎなかつたが現在は二千三百名、先生は五十名といふ驚くべき發展ぶりをしめしてゐる

日本人の學校で習ふ支那語や中國人の學校で習ふ日本語が學校が退ければ直ちに街頭で實踐される。親が娘を通譯として買物したり洋車をねぎらせる風景がよく見られる

支那刺繡の名がある通り中國人は手先きの仕事が器用である。この天分を新らしく生かして時代に適した工藝品を作らうと日本婦人が絞りと刺繡の指導をしてゐる

華北交通三萬の日人社員の中二萬人が有家族者である。その中留守宅家族が約一萬三千。良人を武器なき戰士として前線に送り留守宅を守る日本婦人の甲斐甲斐しい姿

公寓（アパート）では日支人が入り混つて住んでゐるのでまづ奥さんと太々から日支親善がはじまる。子供の洋服を作つてやつたり饅頭の作り方を習つたり一番手近かな實踐です

漢代殿址出土の礎石

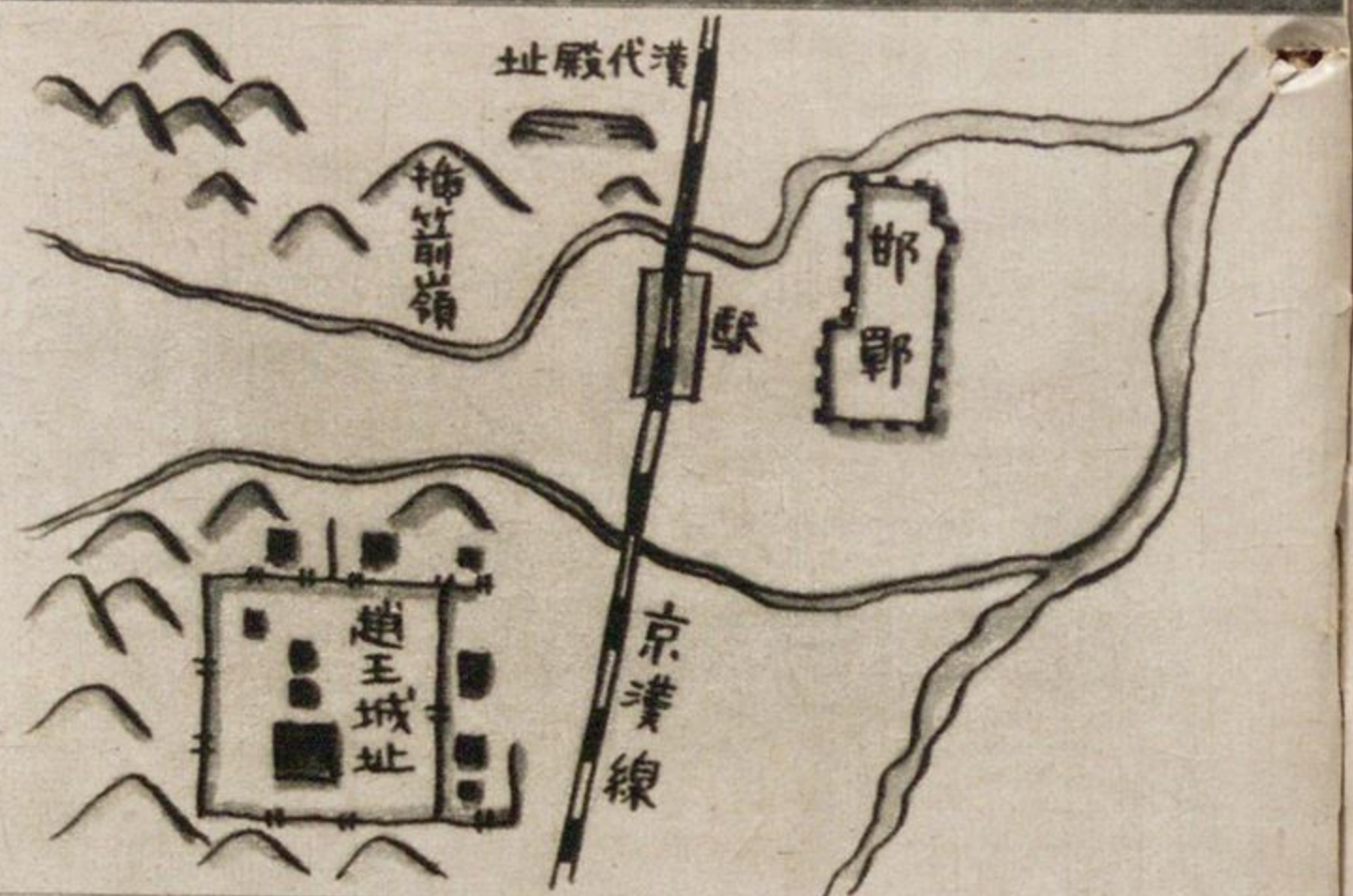
邯鄲蹟の發掘狀況

Excavating
he Kantan
Ruins, Peki-
g-Hankow
ine

邯鄲遺蹟の發掘

京漢線

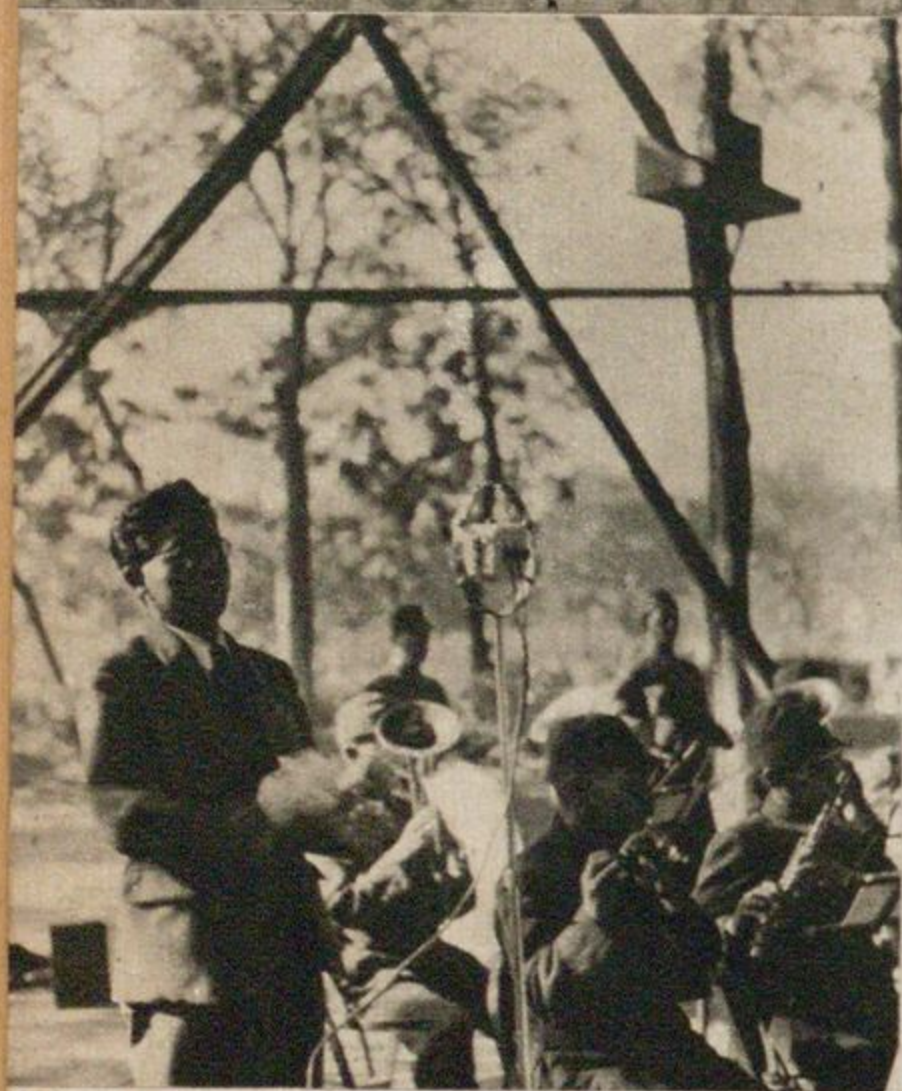
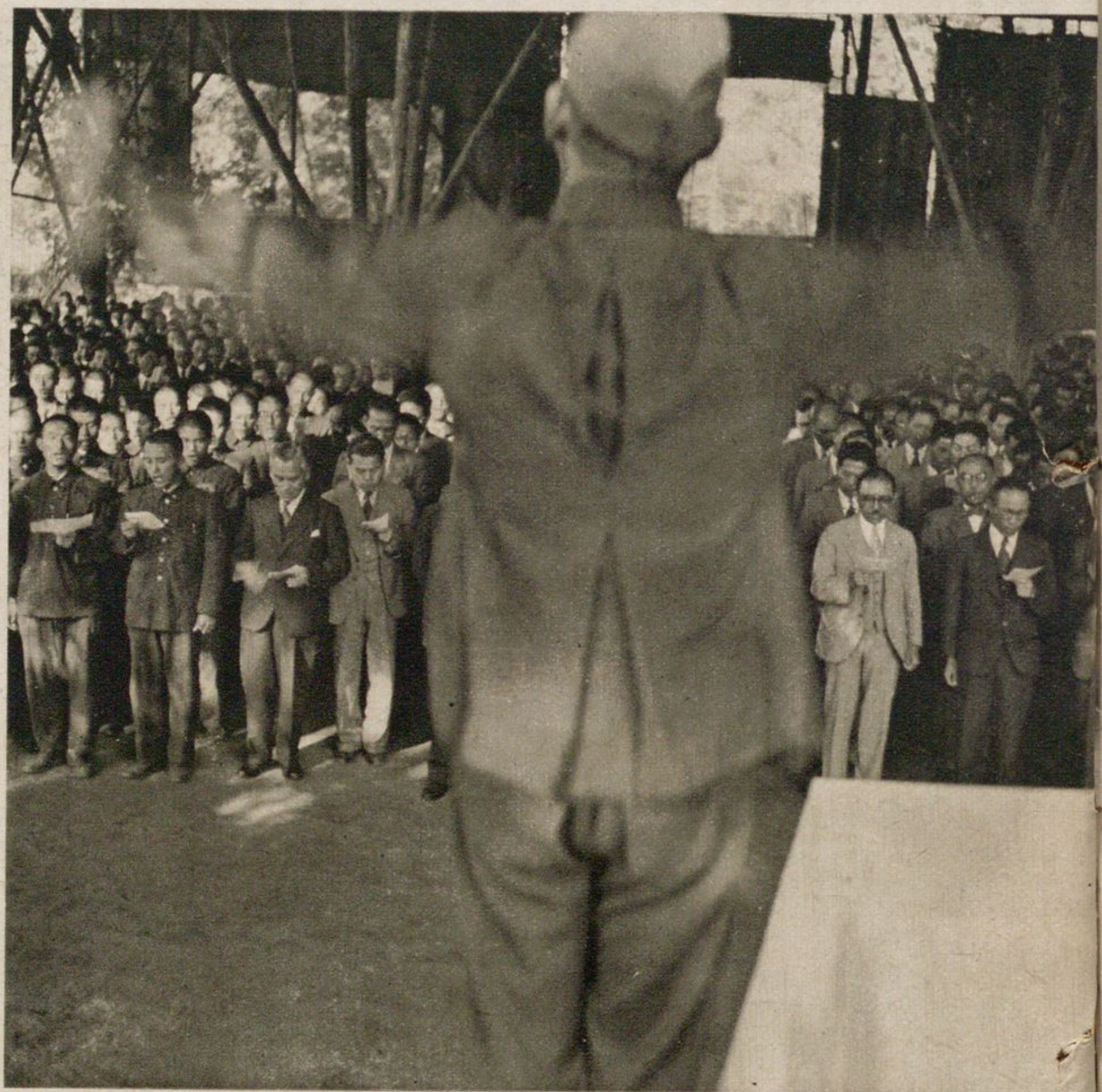
盧生が夢枕で知られた邯鄲は今日こそ京漢鐵路沿線の一縣にしか過ぎないが、二千二、三百年以前戰國時代には趙と云ふ國の都の所在地で、殷盛を極めたものである。從つて此處には其の時代から漢代にかけての遺蹟が多く殘つて居る。古代文化の究明と史蹟保存との目的の爲に去る八月下旬から九月下旬に亙る一箇月餘の學術的調査が行はれた。それは東亞文化協議會の委囑の下に東亞考古學會が當つたものである。調査した遺蹟の主なのは縣城の西南四粁の趙の國都址と西北二粁の漢代の殿址と後者の西南二、三百米の插箭嶺とである。國都址は今なほ趙王城と稱せられて居るところで、東西に長い長方形をなし、周圍約二粁、土壁・門址・宮殿の土壇等も明確に殘つて居た。此の宮殿址を發掘した結果、澤山の礎石や煉瓦の土止めが現れ、又珍しい馬の模樣のある瓦璫や戰國時代の貨幣である明刀錢など、貴重な資料が出土した。宮殿址は十數箇所あるが、龍臺と呼ばれるものが規模最も大で、東西二百、南北三百米程もある。漢代の殿址は後漢の光武帝頃のものと考へられる。此處からは宮殿の礎石や廻廊が當時のまゝで掘り出された外、遺物としては千秋萬歲の文字のある瓦璫や蕨手模樣のある瓦璫を初め、王莽時代に造られ大泉五十と云ふ孔あき錢も出た。最後の插箭嶺は小高い丘陵の名である。其の名の示す如く、昔から夏季大雨の後などには、漢式の銅鏃を澤山出土して居た。今次發掘の結果、又許多の銅鏃を初め、弩の金具、銅弭等を得ることが出來たのである。

漢代殿址出土の蕨手文瓦璫

趙王城址龍臺全景

大きな歴史 小さな歴史

News Flashes from North Chins

東寶秋の大作「熱砂の誓」現地ロケ隊一行は現地各機關の後援を得て北支各地で撮影を行つたが新東亞建設の紹介ものとして現地でも期待されてゐる

北京在住七萬邦人の心身鍛練運動は興亞の基地だけに眞摯熱烈なもので、毎月一週間の鍛練日に市内各所に集まる者四萬人を超える盛況さである

大陸交通の整備完成に挺身する華北交通十萬社員の使命と理想を盛つた雄渾莊重な歌がこのほど完成、同社員の總意によつて宇佐美總裁に獻呈された

秋の北京を飾る第二回興亞美術展は過日中央公園で開催され非常な盛況を呈したが、土地がら皇軍勇士、華人の出品も多く多彩絢爛であつた

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

新生國策イリ
ヂュウム白金ペン付

クラウン万年筆

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

北京廣安門外

大阪 株式會社 澤井商店

北支の內河水運

中野醇

悠久四千年の文明、四億の民衆、國興り、國亡びたる支那興亡史を讀む時にその據つて興り據つて亡びたる原因を探究することは盡きざる興味を覺えしむるのであるが、是を文化的に批判するならば、支那の歷史は又一貫して「水」との鬪爭史であつたとも謂へる。

支那は夫れ程に水に緣が深いのである

歐羅巴の文化は森林を開拓することに依てその經濟を確立した、所謂森林文化であるが、東洋の文化は治水文化であると謂はれてゐる。即ち政治も經濟も宗敎もその他凡有生活現象が治水灌漑と關係を有してゐるのであつて、灌漑治水を離れては民衆の生活が考へられなかつた。地球上の文化民族が居住した國で灌漑が支那程大規模に利用せられ而も農業に對して是程迄に重要なる役割を果し、又縱橫に走る交通路としての運用を見た國は世界廣しと雖も他處にはなかつたと思はれる。大衆の殆ど全部が農を以て生活の根據と爲し而も大陸を縱橫に大小の河川が流れてゐるのであつて見れば、利水の問題が如何に重要であるかと謂ふことは誰れにも想像出來ることであらうと思はれる。支那に於ける水害饑饉は實に徹底的であり、悲慘を極めたものである。而もその頻繁なる度數は、十年間に九回と謂ふ驚くべき記錄を有し、五年六年に一度と謂ふ風が周期的に見舞ふのであつて、それも農作物の繁茂期或は收穫期に定つて襲はれ而も退水遲れて早春期に於ても洪水は退かず、播種期を逸して次年の收穫は全く絕望となり兩年に跨る災禍は、善良なる農民をして遂に土匪と化せしむるのである。彼のパールバックの小說「大地」の讀者は、洪水に見舞はれ土匪の襲擊を受け、住むに家なく食ふに食なき支那農奴の悲慘さに就て餘りに强き印象を受けたことであらう。「治國即治水」とは支那に於て始めて至言である。治水に心を致し民心を收攬したる爲政者のみが長く天下を取つた事實を我等は興味深く眺め得る。南船北馬と謂ふ言葉は廣く人口に膾炙して有名ではあるが南船も北船も共に盛なのであつて、北支に來て見て河川の四通發達に一驚を喫する。七百年の久しきに亙り都が北支にあつた關係上、治水水利の問題に就ても此の地方には特別の注意が拂はれたのであつて清朝時代の康熙、雍正、乾隆の三年代に於ては特に顯著なる實績を示してゐる。洪水防禦用の堤防、調節用の閘門、貯水用としての湖は概ね此の時代の建造遺物なのである。今日に於ては水涸れて航行の用に供されてはゐないが永定河百數十キロの堤防は大部分康熙年代に築かれたものであり、乾隆年代に於ては兩岸に調節閘門十七門が建てられてゐる。

南運河調節には四女寺、捷地、興濟馬廠等四ヶ所に閘門を築造したのであつたが是等の內今日迄利用せられてゐる溝渠は捷地、馬廠の二ヶ所であつて何れも減河（減らす河）と呼ばれてゐる。馬廠減河はその距離約五十キロ、捷地減河は約四十キロであるが記錄の示す處に依ると、前者の三ヶ月間の排水量は約五億立方米、後者のは約七億立方米、兩減河減水量合計十二億立方米なりと記されてゐる。若し之等の減河で增水を調節しなければ京津地方の浸水被害は甚大なるものがあり、文化の發達も貿易の殷賑も一場の夢と化したことと想像される。堤防にしても閘

內容

グラフ

よみもの

門溝渠の築造にしても河道の整理、河底の浚渫或は灌漑等の工作施設は常に當時の政治の頽敗と密接不離の關係に立つてゐたのであつて、善政布かれ夫れ等の工事が滯りなく進展してゐる時代の民衆は祝福せられ幸福であつたのであるが然らざる時代の者はその慘狀目を覆はしむるものがあつたのである

斯くの如き事實から私共は支那は何處迄も水と緣を持つ國であることは寧ろ驚くの外ないのである。水利行政の跡を尋ねるに極く最近に於ては支那全水利機關の統合を行ひ全支那を八區に分けて各水利區域を分擔改修に乘出してゐたが、事變後に於ては建設總署の統制管理するところとなつた。河川問題の解決は北支だけを見ても容易なことではない。然し大陸に前進せる日本人としてはそれが如何に難解なる宿題であつても之を解決せねばならないのである。日華合辦三億の資本を擁して昨年春創設された華北交通會社が國策會社として明朗北支建設の一推進力となり、經濟、政治、文化等各般に寄與貢獻する目的を以て鐵道、自動車と共に水運をも併せて水陸交通の大貫的綜合經營に乘出したのも之れが爲である。

華北交通會社は昨年末以來經營し來つた北支諸河川の汽機船に依る旅客輸送以外、民船に依る貨物輸送を本年三月から本格的に開始し、更に四月には從來民船統制機關として活躍してゐた內河航運公會が發展的解消を爲し、華北交通に吸收せられ之が業務一切を移管せられて、同社は民船の檢査登記航行許可證の下附等、內河船舶の監理行政事務の代行を委囑せらるることとなり現在之が實行に當つてゐる現狀である。交通運輸の大動脈たる鐵道、新興交通機關たる自動車、更に今回內河水運輸送の登場を見るに至つて三者鼎立、北支の交通路は愈多彩となりその好む輸送路に依つて輸送を爲し得ることとなつたのである。抑北支に於ける鐵道は事變前に於て總延長五千五百キロ、試みに天津に於ける取扱貨物數量を見ると年百九十萬瓲、內河水運の方は航行可能水路六千キロ天津に於ける取扱貨物は百三十五萬瓲であつて殆ど遜色なく輸送機關としての水運の地位が如何に重要なるものであるかが容易に窺はれるのである。現在華北交通の運營してゐる河川は先づ第一に大淸河南運河、子牙河の三大河川であるが、之等の河川に對しては每航六十隻を一船團とし大淸河は月五回、南運河は月六回、子牙河は月三回の定期配船を實行してゐる。以上の河川は終發地點が何れも鐵道と連結してゐる關係上水陸兩路の輸送路が開けてゐることになるのであつて、運賃竝保證問題は總て鐵道と同じ建前の下に輸送の引受を行つてゐる。鐵道と同じ運賃であると謂ふ問題は會社が受託した貨物を水運に振向けて水路輸送に依つた場合を謂ふのであるが、假に水運貨物として蒐貨せられた場合は鐵道運賃と比較して大體に割方廉くなつてゐるのである。又必要に依つては五割迄割引しても差支ないことになつてゐるから、穀物、棉花、木材、砂利、石炭と謂つた荒荷貨物は當然水路輸送ルートを選ぶことが賢明なのである。

以上は定期配給に依る輸送の話であるが、華北交通は航行可能の河川に臨時的に配船を行つてゐる。その河川は小淸河、大運河、北運河、東北河等で北支の內陸を縱橫に走り、之等には隨時に船團を組織して貨物輸送をやつてゐる。現在華北交通の經營キロ數は三千二百餘キロ、五月から十一月迄の間に九十萬瓲餘を輸送する計畫の下に運營が進められてゐる。尙汽機船に依る旅客輸送は大體三十瓲型の小蒸汽船で南運河、東北河、小淸河、子牙河等の河川に於て、日發乃至隔日にやつて居り、三月から五月迄四萬人の旅客輸送の實績を示した。又民船輸送の觀點から見て一番問題になるのは、河道の整理、河底の浚渫であつて河川が常に相當量の水深を保ち一定積載量の保持の問題である。例へば大淸河に於ても或地點では水深僅か一米半程度の爲に三十瓲積民船が僅か十二、三瓲しか積めない現狀であるが、之等の問題に對しては華北政務委員會の建設總署が整理浚渫に當つてゐる。

尙最近の情報に依ると建設總署に於ては本問題に對する企畫計畫の成案を得て五ケ年計畫經費一億五千萬圓の巨費を投じ治水工事に着手しつゝある。卽ち、河川上流山地に貯水池を築き中流平野に廣大なる遊水池を造り、下流海岸に大放水運河を開鑿する計畫である。

この計畫が實現される曉には、航運經營方面より見ても大なる利益を享受することが出來るであらう。又華北交通では現在の民船の航行狀態がマストの先端から綱を引張つて五、六人の船夫が肩で引いて行く誠に原始的な方法なので、これを汽船で曳航する方法或はモーターに依る民船改造を行つて數十年來の舊殻を破り科學的合理的經營方法を行はんとしてゐる。

筆者は華北交通水運部調査役

北京秘史

乾隆帝と香妃

宇澄朗

乾隆十八年（西暦一七五三）新疆天山北路に蟠踞して猛威を振つてゐた準噶爾を討征するため、兆惠を總帥とする大軍が派遣された時、かねがね準噶爾に身體から異薫を發する絶代の佳人があることを聞き、獵奇な乾隆はその生擒を嚴命した。香妃がそれである。

香妃は準噶爾屬和卓木酋長の夫人であり、自ら矛をとつて抗戰したが敗れ夫は生死不明、香妃は清軍に生擒られ北京に送られた。年は二十を少し越したぐらゐではないかと想像される。

香妃を獲た乾隆の悦びは喩へやうもなかつた。あらゆる手を盡して香妃の歡心これ努めた。外蠻の一婦、宮中奉侍のうるさい律をわきまへぬ香妃を遽かに貴妃として後宮に入れかね、暫らく寶月樓（一名望鄕樓）にかこつた。今の中南海公園の錦爛まばゆき新華門の二階が卽ち寶月樓の故址である。

樓上から眺めると、一望の下、準噶爾の故里を偲ぶ回々敎徒の街を近くに建設して回族の集團移住を行つて香妃望鄕の念をやはらげ、飲食はむろん、一切の調度これ亦た香妃の故鄕の起居に倣ひ、實に至れり盡せりであつた。

だが、微笑みは終に香妃の頰に浮ばなかつた。いとしめやかに室内に端座して、亡びし祖國、生死定かならぬ夫を想つては、しめつた涙の日を送るばかりであつた。繪にもまさる南海の景色、春の花、夏の水、秋の月、冬の雪なに一つ慰樂の對象ではなかつた。何うしても乾隆の意になびかなかつた。

折を見、帝意をほのめかしてさぐりを入れると、香妃はいつも懷劍をぬくのが常だつた。いつ如何なる時でも懷劍を肌身から離したことがなかつた。

かまびすしい後宮妃嬪の間には、あらぬ噂が噂を生み、香妃に恩寵を奪はれんとする宮妃たちの妬みは、あさましい限りであつた。

その舞び飛ぶ噂のうち、香妃復仇の刄が、いつ乾隆の身に及ぶか知れぬといふ噂は、乾隆生みの母の太后を極度に憂慮させた。

☆

悲しい日が來た。

それは天壇祭祀の日のことだつた。

乾隆は朝律により文武百官を隨へて天壇に行幸、おごそかな祭典を擧げたその留守中の出來ごと。

美しい轎を用意した數名の太監たちが突然寶月樓に現はれて

「香妃さま、太后さまのお召しで御座りまする」

「突然のお召し、なに御用か」

「一度お招きしたいと、太后さまは常常口癖のやうに仰せられて居られましたから、今日は、おくつろぎで御物語をしたいといふ御意では御座りますまいか」

狡さうな老太監が巧みに喋つてちよつと上目を使つた。

香妃は化粧を改め衣を整へて轎に乘つた。轎がゆれるごとに胸の不安がゆれた。轎は神武門から進んで慈寧宮に着いた。

正面の一段高い寶座に太后、その後ろに乾隆の皇后と妃嬪四五人ならび、寶座の下位兩側にはたくましい武裝の衞士が幾人も侍立して、するどい眼を香妃に向けた。

「太后さま御機嫌の態を拜し恐悦を申上げます。中華の禮儀をわきまへぬ外藩蠻族の女子、御遠慮申上げて未だに拜謁いたしませなんだ」

香妃は跪座三拜、明晰に挨拶をした。

「おゝ香妃か。ようこそ見えた。聞きしに優る端麗な妃ぢや。…香妃實は今日、わしとしてそなたに訊ねたい儀があるのぢやが、嘘僞りなく申したてよ」

后の聲は、次第に峻嚴みを加へた。

「香妃、そなたは、短劍を肌身離さず懷ろにして居る由、何の爲にぢや」

「この懷劍のことで御座りまするか」

香妃が懷から取出したとたん、

「不敵者ツ。大裏の律を知らぬか」

侍衞の武士が、一喝したときは、懷劍は香妃の手からぽろりと落されてゐた。慌てゝ拾はうとしたが遲かつた。

「この懷劍の次第、つゝみ隱さず申してみよ」

「はい。その懷劍は夫の形見で御座ります。私を護るものたゞこの一ふりしか御座りませぬ。肌身離さずつれ添ふもの、この劍のみで御座ります。この一劍こそは、祖國の魂で御座りまする。夫の魂で御座りまする。私の魂で御座りまする」

香妃は、さめ／＼と泣いた。

「うむ…もう一儀訊ねる。そなたは亡國の仇として我朝を恨み、帝をも恨んで居ると申すが眞實か」

「祖國亡ぼされ、一族全滅に遭ひ、夫を殺されたこの恨み、永劫魂から消え去りかねまする。太后さまは、それをお咎めで御座りますか」

涙を收めて上げた香妃の顏は、凄いほど蒼白かつた。

「うむ、隙あらば、この劍で帝を刺さんとする心算であらう喃」

「その決心も未だに變りませぬ」

「健氣な女子ぢや。ぢやが、なう香妃すべては宿命ぢや。諦めよ」

香妃

「宿命で御座りませうな。何んとも致しかたが御座りませぬ」

「では、香妃、今度そなたは何うする氣ぢや」

「今の私の眼前には、たゞ死の一筋しか進む道が御座りませぬ。太后さま、私に死を賜はりませ。お慈悲で御座ります」

改めて三拜し、合掌した。

「…餘儀なきことぢや。香妃然らば望み通り死を賜はるぞ」

「有難きお思召で御座りまする。最後にもう一つ御願ひが御座ります。死後その懷劍を私の懷ろに入れて下さりませ」

香妃は、そのまゝ直ぐ慈寧宮の後ろの空室に導かれた。

今は悲しき涙一滴もなく、蒼白の頰に、いき／＼とした欣びの紅みさへ色づいてゐた。後ろ姿を見送つた太后の老の眼には涙がいつぱい溢れ、皇后も妃嬪も顏を蔽うた。

蟲の知らせか、胸のけはしく不安な乾隆は、祭典が畢ると、直ぐ輿をせかせて歸還、太后に謁して、言葉せはしなく復命し、その足で寶月樓に馳けつける考へだつた。

「陛下、陛下が眞に香妃を愛する唯一の途をわしが代つて執りました。後室に行かれてみやれ」

太后は袖を顏にあてゝ嗚咽した。南無三、萬事休矣。いきなりグワーンとハンマーで頭腦を打ちのめされたやうにふら／＼となつて後室にころげ込んだ。

白綾を頸にしめ從容自盡した香妃の姿。

つめたくも、まだ馥郁と薫る神々しい香妃の屍を抱き、乾隆はいつまでも聲をあげて慟哭をつづけた。

（附記）

香妃の實傳は何うもはつきりしない。和卓木の祖國と彼女の歸還とを條件として竟に乾隆の意になびき乾隆と香妃とが馬のくつわを倂べて狩獵を樂しんでゐる繪が奉天の博物館に在るともいはれる、彼女の最後は本篇の如くに一致してゐるけれども香妃のお墓については是れまた諸說紛々である。貴妃の禮を以て東陵の乾隆の墓陵近くに葬られてゐるともいはれ、また俗說には北京城南陶然亭に在る香塚が卽ち彼女の永眠の地であるともいはれる。

かういふ烈婦のお墓すら判らず後世有情人の參詣も出來ないのは誠に殘念である。

（筆者は北京在住中國人）

灯す胡同

―哈達門外點描―

平田小六

1

低い家並に區切られた道の上には、犬が眠つてゐる。深い轍の跡の柔い土が、すつぽりとその身をつゝんで呉れる。

夕暮なので、母と子供が門口へ出て往來を眺める――日暮の空のやさしい薄綠が、向ひ側の屋根のゆるやかな曲線を、くつきりと描いて見せてゐる。蚊が二つ三つ飛び上るのも見えるが、あまり小さくてすぐ見失つてしまふ。あたりには靄のやうに夕飯の煙が漂つてゐる。――土と紙のつゝましい家々を、悲しげな夕暮の氣配が靜かにつゝんでゆく。

扇屋が歸つて來る。簪のやうに擴げた鈴の列が、絶えだえな吐息のやうにチチ……と鳴る。見送る子供達に夕暮の涼風が心地よい。そこで子供達は歌ふ。

我足猫，我是猫
耗子倆快々跑
膽小的快々跑
ウォ ジーョン タアイ シヤオ

四辻に太つちよの床屋が現れるのはその頃だ。蹄鐵屋の同じやうに太つた大將もこつちの方へ歩いてくる。さしづめ龜さんと安さんの會談、どちらもランニング・シヤツを胸の上まで捲り上げて、大きなお腹が丸出しだ。――剃りたての頭に夕風が涼しい。

「川端の婆さんが死んだつてさ。」

「とう〱ね、誰があとゝりになる？」

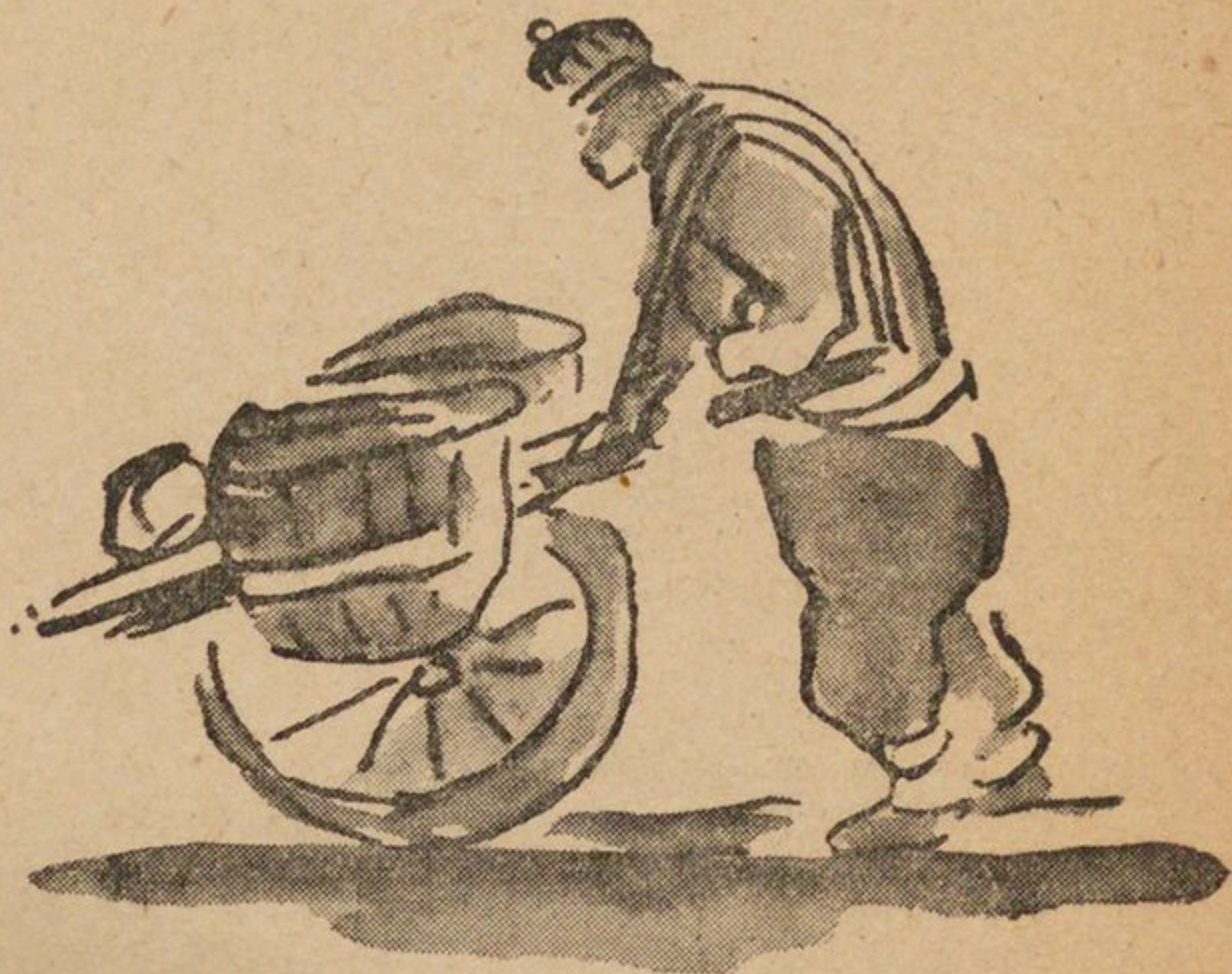
「それがわからない。枕の下からお金が出たつてほんとうか？」

相手の驚いたやうな表情。

梶棒にぶら下つた洋車夫が來て、いつの間にか立止つてゐる。西瓜賣が屋臺をおきざりにして會談に參加、小さな、樂しげな人だかりだ。八百屋が樹陰からもう一聲高く叫ぶ。野良犬が懶げに四辻を橫ぎる時、日沒の最後の光芒が槐の高い梢を越えて、靜かに夕暮の翳が落ちて來る――やがて夜となれば閉ざされた胡同に人影は絶え、灯影の淡いいぶせ家に子供達の笑ひ聲も歇み、貧しい家々の夜が更ける……。

2

四辻の陽溜は傴僂の爺さんの繩張りだ。陽が暑い頃だと、向ふの槐の樹陰に店を擴げる。小さなアンペラの上にあめちよこを一摘みづつ列べる。春だと櫻ん坊、夏には小皿に盛つた南京豆秋には皺くちやな棗が十粒ばかり、一つづつ摘んで一山にする。まゝごとのやうに見えるが、これが爺さんのなりはひなのだ。

爺さんは可愛い顔をしてゐる。道を通る慌しい往來の邪魔にならないやうに蹲踞つてぢつとしてゐる。時々瞼をあげて通りの人を眺める。永遠に靜を忘れたやさしいまなざしだ。私はこの爺さんを見るのが好きだ。見ぬ振りをしてその傍を通り過ぎる。猛り立つた私の心に爺さんのまなざしが和睦を求めてゐる。言ひやうのない平安と慰藉に私は涙ぐむ思ひである。すべての過去が一瞬に私を襲ひ、それが一瞬の間に洗ひ淨められるのだ。――いつか濟南の驛を通つた時のことだつけ、品のよくない日本のをばさんに離別を惜んでゐた貧しげな阿媽、變な外套を着た我儘さうな男の子が、汽車の窓から見送りの人々の手に渡る、若い阿媽が人人の背後からそれを見てゐる。時々その子を抱へようと手を差延べるが、もはや阿媽には誰も氣をとめない。とう

とう子供は母の手に渡る、汽車が出る、左様ならをする人々の華やかな聲、その背後に置き忘れられた支那の女がとめどなく泣きぬれてゐるのだつた。汽車の中のいやらしいをばさんを見るにつけ、あんなに別れを惜しんで泣いた支那の女のことを私は忘れることが出來ない。或時繁華な大通りの市場の前で女が泣いてゐた。人だかりの中で舗道の上に折れ崩れ、身も世もあらぬ有様だつた。可愛い眼をした小柄な母親だ。どうしてそんなことになつたのか、抱えてゐる赤ん坊が死んでゐるのだ。私は周章てゝ眼をそむけ、急いで通り過ぎる。しかしそれをいつまでも忘れない。あんな澤山の人々の中で、誰に救を求めようもない空な眼で空を見上げてゐた女の孤獨が私を撃つたのだ。——傴僂の爺さんは私にさういふ悲しい思ひ出をいろ〳〵甦へらせるが、そのやさしい瞳は歌のやうにすべての悲しみを和げ慰めて呉れる。

　この爺さんは胡同を出外れた一番果の一廓に住んでゐる。崩れおちた土屏の中の貧しい房子を想像して下さい。同じ屏の中に仲間があつて、そのうちの一軒は金魚屋だ。この金魚屋には太太も子供もあつて一番裕福だ。季節が過ぎると金魚屋になつたり屑屋になつたりする。

　私はこの金魚屋と二年來の馴染である。この貧しい胡同に春が來ると、私の金魚屋がどこからか金魚を仕入れて來る。四辻までとつとつと足を運び、そこで聲をあげる。

「我賣——大小金魚有」

　金魚屋は悠然とした足並になり、獨特のふれ聲で歌ふ。胡同から胡同へと流れてゆく金魚屋のその奇妙な節まはしは私の耳に馴染み、年毎に新しい春の訪れを告げるものとなつた。

　その年が暮れ無慘な、いたましい冬が來た。私は病み、疲れてその胡同に暇を告げる。私はあのみすぼらしい胡同も、傴僂の爺さんも、金魚屋も忘れてしまふ。そしてたゞこの國のいたましさが漠然と重苦しく胸に悶へる。空しい時の流れが苦汁のやうに心に滲みる。

　さうした或朝私は淺い眠から激しく呼び覺されて戸外に飛び出して行つた。「我賣——大小金魚有」

　あのなつかしい呼聲が私を目覺めさせたのだつた。それはあの耳馴れた金魚屋の聲ではない。鳴く鳥の初音を思はせるやうな、たど〳〵しい少年のふれ聲だつた。然も紛ふかたないあの金魚屋の節まはしなのだ。

　この時私にあの貧しい胡同の一切が生き〳〵と甦へつて來ると同時に、私を押へつけてゐた現實の重さが、不意に輕々と飛び去つてゆくやうに思はれた。

　私は哀愁と歡喜の入り亂れた奇妙な感動に涙を泛べ、少年金魚屋の悠然とした足どりを見送つてゐる。

　——父親の金魚屋が死んだので、これが二代目なんだな……と私は勝手に思ひ込んでゐる。（筆者は北京在住小説家）

京包線と火山

小林德

今日までの發見によると京包鐵道沿線には近期火山の遺跡が十七山乃至二十一山あることになつて居る、これを地域別にすると厚和省陶林縣と豐鎭縣の管下に各一の火山群があり他は大同附近の火山群といふ事になる譯である

この火山群の最初の發見者は天主堂シヨイト派の敎士フリーショワー師であるがフ師は陶林縣の火山群に關する概説に觸れてゐるのみで地理的にも地質的にも貴重な報告とは云へない、然しフ師の發表に刺戟せられ、その後、交通の便ある大同火山群に關する調査が進められ昭和四年には德日進氏が越えて昭和六年にはヴアボワーと卞美年の兩氏が更に昭和十二年には尹賛勳氏が實地踏査を行つた結果その實狀略明かとなつた、但し豐鎭縣下の火山群に就いては遺憾ながら今に至るも纏つた報告が發表せられてゐない、以下之等京包沿線の火山群に關する各氏の記錄を抄譯編纂し且つ附圖を添へて置くことにしたが北支那研究上參考の一端ともなれば幸である。

一、紅海子火山群

發見者フリーショワー師は紅格爾圖火山群と命名してゐるが現地は紅格爾圖の南方十五粁餘の地點にあり、且つ火山群は紅海子と云ふ湖沼を包圍せる形に散在するので筆者は之を紅海子火山群と呼ぶことにした。

紅海子は厚和省陶林縣の東南部、京包線集寧縣驛より北方約七〇粁の地にあり、南北最大幅員一粁西北より、東南に向つて細長く、その長さ二粁半ばかり周圍七粁內外で水域面積は僅かに二平方粁に足らざる小湖沼である。

この火山群は六山より成り何れも無名の山である。フ師もその名稱を擧げてゐないが支那參謀本部十萬分一の地圖によるも全部山名は明記されてない、よつて説明の便宜上附圖には番號を附して置くことにした。各火山は紅海子の中心部より遠きも十三粁、近きは七粁の間にあり湖面よりの比高は五〇米乃至百米の間にあり、そして第三號の火山の形狀が最も完整して居り表面は皆熔岩と噴岩にて蓋はれ火山の四圍には放射狀の火山瀬が今も尙明瞭に殘つてゐる。火口は圓形の儘殘存し直徑十八米あり山頂は地平線よりの比高四三米である。

この山の熔岩は東南に向つて約十二粁流下して紅海子に注いでゐる、土人はその山形の規則的なため火山とは知らず人工の山と思ひ込み砲臺の遺跡だと稱してゐるとのことである。

二、官莊火山群

厚和省豐鎭縣の北部にある火山群である、豐鎭の北の官莊火山驛附近にあるので官莊火山群と云ふ。四山より成りその內の二山は官莊驛の北方、京包鐵道の西側間近であるから注意を怠らねば列車內からも一瞥出來る。一は官莊驛の東、二蘇木海子の南にあり、全山黄土で蓋はれてゐるので果して火山

なりや否や疑問視せられてゐる。他の一は官荘驛の南の紅沙壩驛の西南方約十六粁の地點にあるが何れも無名の山である。

官荘火山群の特徴は比較的永年を經過せるため風化作用甚しく前記紅海子火山群に比しその活動時代は更に遠く且つ古かつたらうとのことである。

三、大同火山群

全部で十一山より成れるも内三山は尚詳細なる調査を經るにあらざれは斷定し難いと云はれてゐる。大同東門より最近の牌樓山が二八粁あり最遠の黑山が三五粁の距離にある。いま大同火山群の山名及海拔標高を列擧すると左の如くである（單位米）

山名	標高	山名	標高
黑山	一八八三	狼窩山	一八一二
雙山	一六八八	牌樓山	一七一二
金山	一八四四	磨兒山	一六三〇
小山	一六九八	老虎山	一七二一
旱天寺山	一六五七	菠箕山	一七五八
		馬蹄山	一七五〇

1黑山　大同火山群中の最高峰である附近地平線より百餘米の比高を有し山形不規則で風化の程度も比較的甚しく本火山群中最初に噴火したものだと云はれてゐる、噴岩は山頂から山腹に至るまで到る處散見し小さきは一寸足らずなるも大なるは二尺餘に達するものもある、但し黑山にて採取せし噴岩は黑山より噴出せしものばかりでなく他山より噴射して落下せるものもありと云ふ。

2金山　昔山頂に金山寺ありしも今は移轉して西麓にあり、噴火口は北々東に向つてゐるので南方より北望すると其狀あだかも覆盆の如く見られる。

3狼窩山　山の形より云へば本火山群中最も廣大なる面積を占めてゐる、地表よりの比高約百米、噴火口は直徑四〇〇米に達し西北に向つて缺裂してゐる、東南方より之を望むに覆盤式をなしハワイ火山に似たるものあり、西北裂口の傍に小丘があるがこれは寄生噴火山ではないかとの説がある。

4小山　比高僅に三〇米、山名なきにより假りに小山を命名す、北に向つて裂口あるも全部黃土に蓋はれてゐて果して火山の遺跡なりや否やは尚研究を要する。

5雙山　三個の圓頂あり、二高一低にして全部黃土の蓋ふ所、岩石露頭なく熔岩噴岩も黃土中に埋沒し又三頂共に火口と見なすべき窪地がないから或は玄武岩流が氣體の衝漲作用を受けた結果かも知れず尚研究の餘地ありとされてゐる。

6老虎山　四峰より成り全山黃土の蓋ふ所となり單火山なりしか複火山なりしか疑問の存する山である。

7牌樓山　顯然たる複火山で一主口と二、三の副口がある、主口の傍に一圓頂の小丘ありて形頗る老窩山に似てゐる、山上に噴岩多く散在す。

8菠箕山　別名を閣老山と云ひ比高約百米、噴火口は西南に向つて居りその形箕に似たるを以て名とす、噴火口中及東南腹には玄武岩の露頭多く北斜面は厚き黃土を以て蓋はる、一部分は開墾されて梯畑となつてゐる放射瀨は老窩山の發達には及ばないが又見るべきものがある、火口より南溢して延長頗る遠く桑乾河兩岸に達しその隆起は北支の墳墓式樣相をなし所謂火泥頭となれる所二、三十箇所を下らず、支那火山の景物中稀れなる現象を呈してゐる。

9磨兒山　比高漸く二〇米にして完全に黃土で蓋はれ噴火口跡も火泥頭と區別つかず研究の餘地を有す。

10旱天寺山　比高六〇米、噴火口の西壁は尚完全無缺に存し其直徑一五米あり、山腹に旱天寺がある、寺碑によるに明神宗萬曆十二年（皇紀二二四四年）の重修に係るものであるが碑によると當時寺の四周や山腹には噴岩薄石多しとあり火山たりしことには疑問の餘地がない。

11馬蹄山　本火山群中の最南端にあり比高六〇米、西及北腹は黃土層厚きも黃土中に火山灰岩層あり、その厚さ七〇糎に達してゐるが右は偶々本區火山活動期の末期に於て黃土の沈積時代となりし事實を立證する。

讀史方輿紀要大同府の條に「火山在府東南、水經注、白登南、有武周川、川東南有火山、山上有火井、南北六十七歩、廣減丈許、源深不見底、尖勢上升、若微雷發響、以草爨之、則烟騰火發」とあり、蓋し大同火山群華かなりし時代を彷彿せしむるものがある、白登山の位置は明瞭でないが金山の西麓、聚樂堡との間に於て二水南北に發し南するを坊城河と云ひ北するを白登河と呼ぶ所を以てすれば白登山即ち金山或は其附近となる譯である。白登山は漢初冒頓が三十萬騎を從へて圍みたるを高帝よく守り禦ぐこと七日にして敵を潰走せしめた史實にも有名な所であるから切に好學の士の一遊を薦める

（カツトは大同火山群位置略圖）

筆者は東亞研究所囑託

二閘の回想

高木健夫

十何年めかに北京に住みつくやうになつて、會ふ人に、

『今でも二閘の舟遊びはやりますか？』

ときいてみるのだが、大抵の人は、それは何處の國の話だ、といつた表情をする。

ぼくは北京の夏を、二閘の蒼い水とともに、十何年か胸に描きつゞけてゐたのに、いまだに二閘行が實行出來ないでゐるのは殘念だが、いとせめて、いまは昔の二閘の、憶ひ出を活字に再現してみよう——。

馬車に乘つて、……

さうだ、八月のはじめの頃だつたが日華男女混合の六人で、思ひ思ひの辨當を持つて、哈德門をくゞり、東へ、橋を渡り（なんといふ橋か忘れた）『留神火車』の白い掲示板の踏切を越したところが、たしか舟着場で、遊覽船が澤山浮んでゐた。遊覽船といふと體裁がいいが、じつは小舟にアンペラ掛けの、おサムいみたいな遊覽船だ。（いま考へてみると、そこは東便門外である）

遊覽船に毛氈を敷き、座を占め、舟は裸體の舟夫の竿で動きだした。

右手の岸はいちめんの葦、左手の岸にはアカシアの行儀のいい整列。ふりかへる眼に東便門の城樓と、遠く霞む西山の山並の紫と——。

やがて、舟夫が、投綱を打つ呼吸よろしく綱を岸へ投げると、いつのまにか一人の小孩兒が現はれて來て、えいや、えいや、と舟を曳きだした。

舟足かろく、げげツツ、と行々子がしきりになき、白い鴨子が葦を分けてぎやおぎやおと現はれて來るなかを、曳かれる舟は、案外な速さで、東へ、東へと快走するのだ。

＊

舟曳きの子供の疲れたのを潮時に、舟を葦の間へいれて、辨當をひらく。

R小姐が、達者な日本語で、

『人間は一本の葦にすぎない。しかし喰べる葦である！』

といつたので、みンなはどツ！ とわらつた。惚氣になつて恐縮だが、今から考へると、ぼくはどうもR小姐にすこし惚れてゐたらしい。なんとなればぼくは、今でも彼女の顔の輪廓や表情を、生き生きと憶ひだすことが出來るからだ。

彼女は、さういつて、ちらしずしに箸をつけた。岸に上つた舟夫はこの日本葉の花びらのやうな彩りを、ふしぎなものに眺め、それを美味さうにたべる小姐をもつとふしぎさうに眺めてゐた。もつとも、ぼくは、この小姐の食事を美しいものに眺めてゐたにちがひないのだが……。

食事がをはると舟はまた動きだし、間もなく閘門——すなはち頭閘、通州まで十の閘があるわけだ——のあるところへ來た。家が二、三軒、詩にあるやうに赤い牌旗をだした茶店。

ぼくたちは、こゝで舟を捨てて、また別の舟に、乘りかへるのである。運河はこゝでせかれて、二丈ばかり水位が下つてゐるからだ。

閘門から、水はどう、どう、と瀧のやうに流れおちてゐる。その下は瀧壺のやうに深くなつてゐて、裸童らが、銀貨を投げろ、とせびる。瀧壺へ銀貨を投げると、この小河童たちはすかさず飛びこんで、それを握つて上つて來る。

『こんな瓣をヤンキーがつけたんだわ。憎いわねえ』

R小姐の人種的憤慨に同感しながら

も、おのおの銀貨を灑壺に投げてやつて、下の舟に乘りうつつた。
水面はいよいよ蒼く、綺麗に澄んで來て、慈姑や澤瀉やひつじぐさの花がまるで水盥のなかにあるやうに落ち着いて浮び、ててツぽぽう、それ鳩が啼いてゐる。
……高！
いつのまにかねむつてしまつたぼくは、R小姐やO君に手をとられて、いきなり岸へひつぱりあげられた。
茫々たる雜草のなかに辛うじて見える大理石の階段をあがると、白松の林その林のなかに鵲がさかんに飛び、さかんに啼いて、突き當りに朱塗りの門と塀が朽ちかけてゐる。
『いつたい、どこだい、こゝは！』
『ねぼけるなよ』
『おほほほ……』
で、誰も相手にしてくれない。で、いまだに、こゝの地名も何もぼくは知らない。地圖でみるとどうも公主廟、または公主墳とあるところらしい、と今になつて思ふのだが……。さうだとするとこの墳は清代の佛手公主のものである。

*

門のまへには石の馬像、將軍像、兵士の像が一對づゝ。門を入ると七甍をちりばめた影壁。それに樂書。ハート形に頭文字、上海大學、その他いろいろ。白い喇嘛塔がその奥にあり、それらをめぐつて、白松、柏、楓、楡などがほしいまゝに茂り合つて、烏や鵲が巣をつくつてゐる。
離々たる草のなかに腰を下ろし、ぼくたちは魔法壜の紅茶をのみ、チョコレートの銀紙をむいた。
たべ散らかすと、ウーンとひつくり返つて晝寢をする奴があり、サンタ・ルチアをうたふお孃さんあり、肩をならべるアベツクあり、ぼくはひとりで喇嘛塔のまはりを歩いてゐると、また
『高……』
だ。こんどはすこし低い聲だ。
『高、こんなところに讖悔聽問臺をおくと、きつとすばらしい戀愛ざんげが聽かれるわね』
『では、承はりませう』
『あら、いやよ』
R小姐はほんとに怒つたやうな眸をした。
『おや、葉卷が落ちてるぞ』
ぼくが、さういふと、R女士は、鼻を鳴らすやうにふふんといひ、
『あたしのお友達、こないだこゝで結婚式あげたばかりよ』
『へえ、こんなところでね』
『さうよ、變つてるわねえ』
『君は、そのお友達好きだつたんだろ？』
『さう、好きだつたわ、でも、今は嫌ひ！』
『どうして？』
『結婚しちやツたから』
『なアーんだ。ぢやその友達は、つまり男友達か』
『そんなことはいはないでよ。女同士だつて嫌ひになること、ないこともないでせう』
『ごま化してらあ』
『ううん、ごま化してないッ！』
彼女は東京の聖心女學院の卒業生でちやうど、ぼくと二つちがひの、日本流にいふと『ひのえうま』であつた。

*

——つまり、十何年まへのそのころの青春の年齢である！　彼女は、中國人のくせに『ひのえうま』といはれるのを、とてもいやがつてゐた。だからぼくはこゝぞ、と
『中國ではやつぱりひのえうまは失戀するのかなあ』
といつてやると、彼女は俄然、
『うそよ。その人は男ぢやないわよ、うそよ、うそよ』
と、肩をふつて白松の幹にとりがすつて、しやくり上げはじめた。
『どうしたアい？』
友だちがかけて來た。
『あたしたち、結婚式あそこでやつてたの』
おほほほ、とR小姐はひどく高い笑ひ聲をたて、
『さうかい、ぢやあ伴奏してやらあ』
といふ友の口笛のウエディング・マーチに合せ、ぼくと彼女は胸を張り腕を組んで歩きだした。
僕は横眼でみた彼女の頰に、涙がすぢを曳き、それが西陽をうけて固まつてゐるのを、なんだかしゆんしゆんと胸にせまる痛さで感じとつてゐたことだが……
二閘で道草を喰つてしまつたが、それからあとのことは覺えてゐない、やつぱり舟で歸つたわけだが、どうもはつきりしてゐない。
なんでも歸りの舟の水面が西陽を反射してひどく眩しかつたことと、そのまぶしさのなかで、R女士が他の女群とともに讃美歌を歌つてゐたことをおぼえてゐるだけだ。
來年の夏、もし二閘の水にして濁れなかつたならば、ぼくは、新東亞的なもひとりのR女士的な小姐とそのグループをつくつて、も一ぺん舟遊びをしてみようとおもつてゐる。

食糧と統計

みづの・かほる

北支農村の貧窮さを語らうと思へば不幸にもその材料は、濱の眞砂の如く盡きない。而し何を言つても人間は喰ふことが第一で、喰えないといふ位深刻な貧窮はない筈である。こゝに北支の食糧問題の重要さがある所以である。

そこで今日は、北支の食糧と統計と題して、北支の食糧作物の生産と分配はどうなつてゐるかに就いて見やう。

こゝに云ふ北支とは、前にも度々引用した舊北支五省のことではなくて、現在華北政務委員會の行政管下たる地域で、北は蒙疆を除き、河北、山東、山西の三省に、河南省の新黄河以北と江蘇省の約北半部を包含する。

本地域に於ける耕地面積は、大約二千萬町歩に及び、人口は九千六百萬を算する。これを滿洲に比較すると、彼の地の耕地面積は大約一千八百萬町歩であるから、耕地面積に於ては、北支と滿洲とは略々相似てゐることになるが、人口から云ふと、北支の九千六百萬に對して滿洲では三千八百萬で、北支の約五分の二に該當する。そこで、これを單に耕地の大小と人口の多少から見れば、北支は滿洲より人口の密度が著しく高く、土地の分配が著しく少いといふことが出來る。

又これを食糧作物の産量から見ると北支ではこの耕地より小麥並に雜穀、(大麥、燕麥、高粱、粟、玉蜀黍、水稻、陸稻、黍、稗、蕎麥)の所謂食糧作物の産量は、一、五五〇萬瓲(昭和一五年七月一日豫想)であり、滿洲の食糧作物(高粱、粟、玉蜀黍、黍、小麥、水稻)の産量は、一、四一三〇萬瓲(昭和一四年九月一日豫想)で、兩者の間には大差が無い。

次に、北支と滿洲との食糧作物の生産條件を比較すると、北支は氣溫に於て滿洲よりも惠まれ、殆んど二年三作乃至一部に二毛作さへ行はれ、作付集約度は滿洲よりもずつと高いが、北支の耕地は、滿洲の耕地に比べて肥沃度が低いので、結局單位面積の生産力から云ふと、兩者の間に大なる相違がないことは、前述の産量と耕地面積からも一見して容易に窺はれるのである。

そこでともかく滿洲では、一千八百萬町歩の耕地に食糧作物を、一、四三〇萬瓲生産して三千八百萬の人口を養ひ北支では二千萬町歩の耕地に食糧作物一、五五〇萬瓲を生産して、九千六百萬の人口を養つてゐるわけである。

しかしこれは極めて大雜把な見方で尚次のやうな諸事情を考慮に入れなければならない。

一、滿洲に於ける食糧穀實の輸出入は、約二、三〇萬瓲の出超となつて居り、北支では約七、八〇萬瓲の入超を見てゐるが、しかしこれを地域内の全産量に比ぶれば大なる數量ではないこと、

二、生産量の内、一部を翌年の種子として消費しなくてはならないが、この點北支は小麥の作付歩合が多いのでその播種の消費比率は、滿洲よりも稍稍多く見なくてはならないこと、

三、食糧作物以外に、滿洲には特産大豆(四〇九萬瓲、一四年九月一日豫想)があり、北支にも亦落花生(六五萬瓲)と、大豆二五六萬瓲、何れも一五年七月一日豫想)とがあるが、この特用作物の一般食糧への利用率は、滿洲に低く、北支には著しく高いこと、

四、北支には五五三萬瓲(一五年七月一日豫想)の甘藷が、前に擧げた食

糧作物以外に生産されてゐるが、これは一般穀物から見れば、大約三倍の斤量が穀物と略等價であると見て差支へないから、換算して約一八四萬瓲が、前述の北支の食糧一、五五〇萬瓲の上へ加算されることゝなること、

五、食糧作物消費の、相當大きな部分を占めるものに、家畜の飼料があるが、この點北支の家畜の頭數が判然しないので、これに就て兩地域を比較することは出來ない。しかし滿洲より北支の方が割多い家畜が飼養され、且つ又滿洲の家畜が未耕地の牧草に依存するところが多いのに反して、北支には未耕地が少い關係上、勢ひ食糧作物を割多く消費してゐること、

以上の諸事情の考察から、北支と滿洲との著しい相違は、北支には甘藷なる特殊作物の生産と、大豆の割多い食糧への利用とが、食糧消費を補つてゐる。だが又一方北支では、家畜飼料としての割多い消費が、食糧作物の領域へ侵蝕してゐると豫想されるのである。そこでこの二つの特殊事情は、こゝでは一應相互に相殺されるものと假定し、さて前述の食糧作物を人口に割宛てゝ見ると、滿洲は一人當〇・三八瓲、北支は〇・一六瓲といふ數量になるのである。

ところで吾々は、もはや前述のやうに兩地域の食糧生産數量を詮索した以上、この數字を兩者相比較し、以つて直ちに北支が、滿洲より著しく食糧の分配量が少く、又北支の貧困性がこゝにあるのだと言ひたいのだが、かうした裁斷を下す前に、も一つこの數字の出た統計の根據に、大きな問題を孕んでゐることを知らなくてはならぬ。

一人當〇・一六瓲と言へば、三百二十斤で、これを北支一般の常識として小麥並に雜穀の一人當玄穀消費量は四百斤＝〇、二瓲見當であらうと言はれてゐるが、もし假りにこの消費數量と前述の人口數とから算出すると、年産一、五五〇萬瓲の食糧作物では、家畜へ一粒も喰はせず、翌年の種子を殘さぬとしても、尙二千萬の人間が日干になるといふ計算しか出て來ない。

そこで筆者は、この矛盾を、統計の誤りに歸すべきであると思ふ。卽ちこの誤謬點は、耕地面積が極めて過少に示されてゐるといふことである。このことは北支に於ては、由來課税の主たる對象が土地であり、殊に不合理な地税の搾取の結果は、土地所有者としてあらゆる方法によつて、課税面積を欺瞞することに努めさせたのである。（因みに、北支の耕地二千萬町歩は、總面積に對比すると四一%、滿洲は一八%で、世界でこの率の最も高いのはデンマークの六〇%である）

從つて北支には、黑地といふ言葉があつて、無税の土地が可なり多く存在し、而もこの脫税行爲は土豪劣紳に於て一層甚しいものがあるのである。この間の消息は、すでに各種の資料にあらはれてをり、筆者も亦かつて農村の實態調査に當つて、實在面積が課税面積の一・八倍もあつた一部落を發見したことがあるのである。

又最近耳にしたことであるが、某縣が今回土地臺帳を整備するに當り、縣下の土地所有者に所有地の實數を報告させ、もし測量の結果相違ある場合は沒收するやう嚴命を發したところ、驚く勿れ一躍從來の課税面積は、四〇%の增大を來たしたといふのである。

これも亦事變前のことであるが、縣情調査の際、某縣では縣長が獨斷で從來の課税面積を二分の一に切り下げ縣治を刷新したといふ驚くべきうそのやうな事實がある。

かやうな部落の、かやうな縣の數字の集計たる前述の北支の耕地面積の二千萬町歩は、決して正確なものではないことだけは明白である。

こゝに北支の土地問題のなやみがあるのである。

かう云ふあいまいな耕地の統計から算出した北支の一戸當耕地を掲げて、堂々と北支の貧困さを叫んで見ても、又かうした耕地の統計を基礎として、北支の作物の產量はどうだと言つて見ても、實際のところ仕樣がないのである。

吾々は、北支の少くとも舊農業統計を參考とする場合に、一應かうした認識をもつてあたらなくては、とんでもない間違ひを惹き起すであらう。たゞ僅かに一つの傾向なり、趨勢を示してゐる位でしかない。それでこそ北支の食糧でも、以上のやうなからくりがあるから統計數字より推算すると、食糧不足によつて餓死する筈の農民が、幸ひ餓死せないでゐるのも亦この統計の誤謬によるものである。

然し乍ら、北支は耕地の分配が少くて、食糧が豐かでないことは、今更かうした統計によつての計算でなくても、現實の姿が吾々に教へてくれる。よしんば假りに實在耕地が、現在の統計數字の五割を增したとしても、それより推算して一人當の食糧は、せいぜい〇・二四瓲にしか當らず、滿洲の一人當〇・三八瓲には未だ遠く及ばないのである。

筆者は華北交通資業局調查役

可園雑記

加藤新吉

この頃の可園の朝は小さいお客様で賑ふ。鵲も毎朝來はじめた。北京は小鳥の天國と謂はれるだけあつて、名も知らぬ小鳥が群れてゐる。その名を知りたいものだと思ふ。

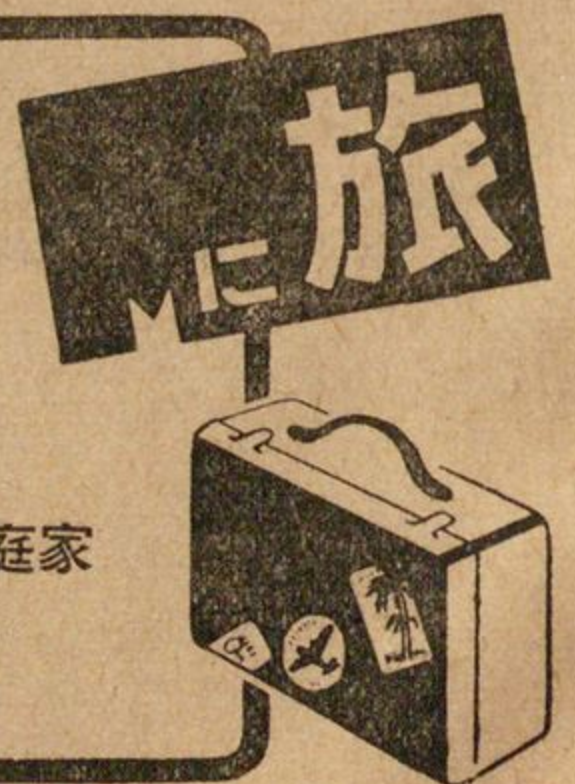
こゝに住んですぐ可園佳客帖を備へて置けばよかつたのに、つい取紛れて備へなかつたことは殘念である。可園は必ずしも名園ではない、主人は全くの無名人であるが、北京が名所であるばかりに可園にもいろいろの佳客が來往する。銘々自署して貰つて置いたらよき記念になるであらう。

最近の朝の珍らしい客は柳宗悦氏、矢代幸雄氏、河合寛次郎氏、濱田庄司氏、式場隆三郎氏、何れも美術工藝の調査に來られた人達。吉田璋也氏、この人は式場氏と同窓の醫學博士で軍醫として應召され、目下石門地方で民藝の指導をして居られる。私は此一行の所望に應じて或日朝食を差上げた。支那風の朝食を試みたいといはれる儘にふだんのものを差上げただけの話である。

献立はまづ粥、米や粟や玉蜀黍の粥を交る交る作らせることにしてゐるがこの朝のは小豆を入れた粟粥、普通は白砂糖を加へてたべる。饅頭、餡の入つたのと入らぬのと二種。白菜湯、火腿即支那ハムで味をつけた白菜のスープ。油炸果、かりん糖に似た感じの輕い油揚、其儘嚙つてもよく白菜湯に入れてもよい。廿日大根と葱、これは鹽又は支那味噌をつけて生の儘嚙る。以上、民具として使はれてゐる安物の赤繪の碗や皿に盛つた。その碗や皿は缺けてゐたり、割れたのを鎹で接いであつたり、甚だ失禮な話であるが、これもふだんづかひを其儘使つた。

正直に云つて北京人の朝食がほんとはどんなものであるか私もよくは知らない。たゞ、北京で二十年も厨子（賄方）をしてゐる男に家の賄一切を委せてゐるので、彼の出すもの即北京の朝食なるべしと心得てゐるのである。私が曾て或る料理を作れと言つたところ自分は北京の厨子だからそんな南方料理は作りませんと斷つた。そんな頑固な男の作る料理だから一々説明はなくとも北京のお總菜だと思つて、私達は朝晩たべてゐるのである。

朝の十時頃、可園の門を出て地安門へ歩いて行くと、油の瓶をさげ、ちよつぴりの味噌を入れたむき出しの碗をかゝへ、或は一二本の生葱や廿日大根を持つた人々に遭ふ。地安門外の朝の市から朝食の材料、習慣としてほんの其都度の必要だけを買つてかへる人達である。胡同では饅頭賣や油炸果賣が呼聲を立てゝゐる。それをみても、北京人は大體同じ頃同じものを食つてゐるんだなと思ふ。尤もこの時間を北京人は舊來の儘に九時と心得てゐるのであつて、胡同の家の朝食は其頃に始まるらしい。

召南に「羔羊の皮、素絲五紽せり、退食公よりす、委蛇たり委蛇たり」といふは、鷄鳴と共に朝廷に出て執務した官吏が家に朝食に戻る樣を歌つたものだといふ。作者は其妻、悤々と夫を眺めたところとみれば更に情緒があらう。が、それは兎も角、京師の遲い朝食は蓋し傳統的なものかと思はれる。必ずしも芝居が遲いから、麻雀が長いからといふ近代的理由だけではないであらう。尤も單なる想像、別段研究した譯ではない。

陰山山中に藥草がどつさり

厚和市公署實業股では昔から陰山山脈中に幾多の藥草が無盡藏に繁茂し、これを採取製藥すれば尠く見積つても年額五百萬圓にのぼるといふ耳寄りな話を聞き今春來附近各鄕鎭長に調査を命じてゐたところ、この程百餘種類に上る藥草が、山頂に、澤に、廣漠たる平野に無盡藏に繁茂し藥草資源の開發を待つてゐるといふ快ニュースがもたらされた。同市公署では大喜び、早速政府その他と連絡しこれら藥草の本格的採取と、これを處理するため現地製藥會社の設立を計ることになつた。

尙藥草のうち、主なるものは次の如くである。

△防風——年産三十萬圓、効能は天然痘豫防△英芪——二十萬圓、呼吸器病△英苓——二十萬圓、解毒、流毒作用に効果顯著△毛知母——十萬圓、セキ止によし△赤芍——二十五萬圓、コレラ、セキリ△山豆根——五十萬圓、胃腸病に効果顯著。

鼓樓に大手術十五六萬圓で補修

北京城の故都としての典雅な氣韻を長く保存しようと、建設總署都市局の手で今春以來市內外の文化的遺跡——鐘樓、鼓樓、孔子廟、武廟、大高殿、頤和園の長廊、天安門など各所の修築工事が行はれつゝあるが、その中で最も困難なのは元時代北京の中心であつた北城の鼓樓で東南角の土臺が傾斜してゐるのを補修するため最初十萬圓の豫算で着工したが、最近に至り樓の頂上の梁木が腐朽してゐるのを發見し、應急修理が是非とも必要となつたので五、六萬圓の豫算を追加計上してこの修理を續けることになつた。

青島、芝罘間自動車路完成

青島、芝罘間山東半島を縱斷する自動車路線は、豫て華北交通青島自動車營業所で詳細なる調査研究の上昨年末から工事に着手、本年八月中旬完成の見込みであつたが、降雨による惡天候その他のため工事が遲延し、九月上旬に至りその中間萊陽までの路線を開通、更に一ケ月餘の後、待望の青島、芝罘間は見事に完成されたのである。同コースは青島から萊陽棲霞を經て芝罘に達する延長二百四十キロに及ぶもので、同沿線は梨、栗、落花生、芋等の農産物を多量に産し地下資源開發の經濟的意義重大なものがある。

大同の石佛など寶物や古蹟を保存

大同の石佛をはじめ全蒙疆地區の寶物、名所、古蹟に對し近くこれが保護法ならびに保護會官制が制定されて保存對策が講ぜられることになつた。去る九月上旬日本及び華北考古學界の權威が會して、北京に開催された東亞文化協議會の席上、蒙疆文化を代表する蒙疆內の寶物、名所、古蹟が今日なんの保存策もなされず、等閑に附されてゐるのを遺憾とする議が持ち上り保存問題が表面化したもので、目下蒙古政府民政部、禮教部を中心に蒙疆寶物、名所、古蹟、天然記念物保護會官制と保護並に保護委員會設置案が練られてをり、近く細則官制と共に政府委員會議に上程ののち、保存の手が差のべられることになつたわけである。

天津へ寶船百隻民船輸送新記錄

華北內河航行の大動脈たる子牙河は治安の回復とともに益々その重要性を加へてゐるが、この程藏家橋、沙河橋方面から下航して天津に到着した百隻の華北交通民船團は梨、棗、小麥等食料品約二千トンを滿載して來て子牙河輸送の新記錄を樹立したが、今後これらの冀中地區物資は華北交通の船團輸送によつて續々と出廻るものと期待される。

青島水産組合の水揚げ六十萬圓

青島水産組合九月中の水揚げ總額は四十六萬七千六十四圓、前月十一萬三千五百十七圓八錢に比較して實に四〇割の增額となつて水産青島の名を恣にしてゐる。これはもとより季節的な原因にもよるが繫船中の發動機船、手繰船が九月中旬から活潑に行動した結果で、魚類は黃グチ十九萬圓、鯛七萬五千圓、アジ二萬圓、エイ、ヒラメ各一萬圓といふ漁獲ぶりであり、日本側業者三十二萬九千八百四十四圓、支那側十三萬七千二百二十四圓である。

なほ目下修理中の發動機船が全部操業すれば月平均六十萬圓の水揚げは確實とみられてゐる。

情けの診療所開設

貧しい農村民衆の醫療機關として新民會民福科では今春以來全華北四十餘の診療所の內容擴充を圖り、優秀醫療班員を增員して情けの醫療工作を續けてきたが、このほど漸くその統計が出來上つた。

これは最近迄に報告された三十診療所の成績を示したもので、一ケ月の診

療人員四萬一千六百名、このうち一番多い病氣は外科で九千九百九十六名、次は内科の九千六百九十名、三番目が皮膚花柳病科の八千二百四十五名、四番目が眼科の六千六百四名、五番目が小兒科、次は耳鼻咽喉科、齒科、婦人科の順となつてゐる。内科のうちで一番多いのは榮養不良による衰弱で、眼科の殆んど全部がトラホームにかかつてゐるのと、皮膚花柳病科が第三位をしめてゐる點は注目され、これが驅逐に新民會では大いに努力し、民衆衞生の普及に乘出すことになつた。

愛護村土産品の即賣展

華北交通では年額一千百萬圓にのぼる管下全鐵道愛護村の土產品を改良、奬勵して、副業による收入の增加と土俗品を通じて華北蒙疆を内外に紹介しようと係員を全線に派遣調査中であつたが、門頭溝の瑠璃瓦、石門の陶器類芝罘および太原の葡萄酒、京漢線の固城鎭および北戴河の蒲細工その他レースあみ物類などが意外に豐富なのでこれらの中から適當なものを選び、日本各地で即賣展を開催しようと計畫されてゐる。

日本の商標を擁護

事變以來中絶してゐたわが國商標の中國政府への登錄制度がこのほど復活された。大陸へ輸出されるわが新商品が漸次增加する傾向にあり、中國側商人の中に萬一にも日本側の商標權を犯すやうなことがあつては兩國協同の立場からまことに面白くないと云ふので、新らしく辦法が制定されたのである。

防共華北の護り躍進する治安軍

防共華北の戰士——治安軍は敗頽のどん底に呻吟する重慶抗戰陣營を尻眼に逞しい成長振りを示しこのほど新集團四ケ團、治安軍十四ケ團が新たに設置された。治安軍が正式に生れたのは昨年十月で、臨時政府治安部の直轄軍隊として北苑（北京）保定、開平に一ケ集團、天津濟南に各一ケ獨立團が置かれたのがその最初である。

以來純朴な農民層の子弟を鐵の規律の下に猛訓練し、又最近は皇軍と協力して各縣の治定維持並に兵匪討伐に從事し、赫々たる武勳を樹ててゐるものである。

今回の擴張はわが不斷の肅清の見事な結實で二十二ケ團に達する治安軍の躍進は新生華北建設の上から大きな意義を持つものである。尙目下全線にわたつて農民層の子弟に呼びかけ新兵を募集中であるが〃新秩序はわれらの手で〃とばかり各地での應募熱は物すごい勢ひである。又華北には治安軍と同樣の新秩序軍隊として剿共軍第一路、第二路（順德縣近傍）第三路（山東省萊陽縣）をはじめ華北警防軍、冀東地區の皇協軍があり、いづれもわが軍と相携へて防共華北の護りに鐵壁の陣を布き、民衆から非常な感謝を受けてゐる。

津浦線白頭農場完成す

華北交通天津鐵路局では鐵道愛護工作と併行して愛護村民の福祉增進を圖るべく、さきに天津、北戴河の兩鐵路農場を開設し、同農場で作つた農作物種子または樹苗を村民に廉價または無料で配給することにしたが、更に建設を急ぎつゝあつた津浦線白頭の鐵路農場が完成しその將來を頗る期待されてゐる。

白頭農場は面積約二十町步（現畑地使用面積十七町步、建築物面積一町步、道路二町步）で、天津農場の水稻、北戴河農場の種苗に對して、こゝで高粱、小麥、その他一般農作物を優秀な日本技術で栽培し、種子を愛護村民に頒つことになつてゐる。

鐵　北支・蒙疆の統計 (5)

世界主要國別銑鐵生産額

(1936)

二百万瓲　日本
六百万瓲　佛国
八百万瓲　英国
一千四百万瓲　蘇国
一千六百万瓲　独国
三千一百万瓲　米国

北支蒙疆埋藏量

蒙疆　九千二百万瓲
河北　四千四百万瓲
山東

現在日本では郵便ポストの鐵が陶器にかへられたり、廢鐵の獻納が宣傳されたりしてゐるが、鐵は石炭と共に日本にとつてまことに重要な資源であり、その鐵鑛資源を獲得することは非常時日本における目下の急務であらう。西洋の諺に〃鐵を造る國は富み鐵を使ふ國は强し〃と云ふ言葉がある。前の歐洲大戰當時、ドイツ、オーストリの鋼の一ケ年生産額が二千二百萬トン、聯合國が同じく二千二百萬トン、丁度鋼の生産量がバランスして居たから、戰がなかなか勝負がつかなかつたと解說する人もある。昭和十年度における日本の製鐵界が消化した鐵鑛石は四百餘萬トン、その中の八四%は之を輸入に仰いでゐる。我國の生産力擴充計畫によれば五、六年後には消費量一千二百萬トンと云ふ驚異的數字を示すものと推量される。

ところでこの鐵鑛石を容易に且つ速かに安價に供給する地區を求めると、先づ内地、朝鮮、滿洲、支那、南洋の順となるが、前二者は埋藏量の僅少、鑛石所在地の邊鄙、又は貧鑛等の諸理由で增産增掘の難點が横たはつてゐる外に、鮮滿の如く其の地に鎔鑛爐を設備してゐるところからは内地への供給を期待することは出來ない。此點から日本の要求を滿して與れるのは何と謂つても支那と南洋だと云ふことになる。

北支の鐵の埋藏量は石炭よりは遥かに少ない、しかし大規模な製鐵工業を起すに充分であると云はれてゐる。正確な統計はないが一億四千八百萬トンで、尙山西省の各地に埋藏量を有してゐると稱されてゐる。

現在北支の鐵礦中で第一に注目されるものに蒙疆地區の龍烟鐵礦がある。埋藏量は一億トンと稱される大礦山で北支埋藏量の七〇%を占め、平均鐵分は五六%質量共に非常に優秀なものである。龍烟の外に主なる鐵礦として河北省の灤縣、山東省の金嶺鎭がある。

昭和十五年十一月十五日印刷納本
昭和十五年十二月一日發行

十二月號
(毎月一回一日發行)

編輯者　北京・華北交通株式會社資業局資料課　加藤新吉
發行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉
印刷者　小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社　大橋松雄
發行所　東京市麴町區三番町一　第一書房
振替東京 六四二二三番 一四一五番
電話九段(33) 三三四四番

一册定價㊕三十錢(郵送料一錢五厘)
一ヶ年分　金三圓六十錢

廣告取扱
一手取扱所　大阪市西區京町堀上通一丁目二五　一新社
電話土佐堀九三九